

RTE-V850E/MS1-PC

ユーザーズ・マニュアル (Rev. 1.10)

Midas lab

改訂履歴

実施日	Revision	章	内容
1997年09月12日	0.00		暫定版
1997年10月15日	0.80		初版
1997年11月5日	0.81	3.5.4	・搭載可能 SIMM について追記
1998年01月10日	1.00		・33MHz 40MHz、SIMM 実装検査について追記 ・40MHz 推奨値 / RWC レジスタ追加、内容修正
1998年01月16日	1.01	7.2 7.3	・表の 32/16BIT-の説明を修正 ・注意事項 1 の内容修正 ・注意事項 4 追加 ・章追加
1998年07月11日	1.10	15	PARTNER 用モニタ使用時の説明を追加

目次

1. はじめに	1
1.1. マニュアル表記について	1
2. 特徴と機能	2
3. ボードの構成	3
3.1. ディップ・スイッチ	3
3.1.1. ディップ・スイッチ1 (SW1)	3
3.1.2. ディップ・スイッチ2 (SW2)	4
3.1.3. ディップ・スイッチ3 (SW3)	4
3.1.4. ディップ・スイッチ4 (SW4)	4
3.1.5. ディップ・スイッチ5 (SW5)	5
3.1.6. ディップ・スイッチ6 (SW6)	5
3.1.7. ディップ・スイッチ7 (SW7)	5
3.2. ジャンパ・スイッチ	5
3.2.1. JP2	5
3.2.2. AVDD 切り替えジャンパ (JP3)	6
3.2.3. ROM 容量切り替えジャンパ (JP5)	6
3.2.4. TIC 供給クロック切り替えジャンパ (JP6)	6
3.3. スイッチ	6
3.3.1. リセット・スイッチ (SW_RESET)	6
3.4. LED	7
3.5. コネクタ、ソケット類	7
3.5.1. 電源コネクタ (JPOWER)	7
3.5.2. クリスタル・ソケット (JP4)	7
3.5.3. オシレータ・ソケット (OSC1)	8
3.5.4. DRAM-SIMM ソケット	8
3.5.5. ROM ソケット	8
3.5.6. セルフ書き込み電源供給用コネクタ (JVPP)	8
3.5.7. ROM エミュレータ用コネクタ (JROM_EM)	9
3.5.8. シリアル・コネクタ (JSIO1,JSIO2)	9
3.5.9. パラレル・コネクタ (JPRT)	10
3.5.10. シリアル・コネクタ (JRS232C)	11
3.5.11. フラッシュ書き込みコネクタ (JFLASH)	12
3.5.12. プロセッサ・ピンコネクタ (JCPU)	13
3.6. 拡張バス・コネクタ (JEXT)	14
4. ホストPCとの接続	15
4.1. ISA バス・スロットに組み込んで使用する場合の手順	15
4.2. ボード単体で使用する場合の手順	15

5. ハードウェア・リファレンス	16
5.1. メモリ・マップ概要	16
5.2. メモリ・マップ詳細	17
6. SYSTEM-IO	19
6.1. SYSTEM-IO 一覧	19
6.2. UART/PRINTER (TL16PIR552) (3D8-0000H ~ 3D8-003EH)	20
6.3. TIC (uPD71054) (3F-F040H ~ 3F-F048H)	21
6.4. 7セグメント LED 表示データ出力ポート(3D8-0050H [WRITE ONLY])	22
6.5. DIPSW7 読み出しポート(3D8-0050H [READ ONLY])	22
6.6. STATUS 読み出しポート(3D8-0060H [READ ONLY])	22
6.7. コントロール・ポート(3D8-0080H [READ/WRITE])	23
6.8. NMI/INTP130 セレクト・ポート(3D8-0090H[READ/WRITE])	24
6.9. NMI/INTP130 ステータス・ポート(3D8-00A0H [READ ONLY])	24
6.10. EXT-BUS CPU-CORE 用バンク・ポート(3D8-00B0H[READ/WRITE])	24
6.11. EXT-BUS DMA0 用バンク・ポート(3D8-00C0H[READ/WRITE])	25
6.12. EXT-BUS DMA1 用バンク・ポート(3D8-00D0H[READ/WRITE])	25
7. EXT-BUS パス仕様	27
7.1. ピン配置	27
7.2. 信号	28
7.3. データバスの接続	30
7.3.1. 16ビット・データバス CPU (V850E/MS1)	30
7.3.2. 32ビット・データバス CPU (参考)	31
7.4. タイミング	32
7.5. 適合コネクタ	33
7.6. 注意事項	33
8. DMA	34
8.1. DMA 転送可能空間	34
8.2. DMA チャンネル	34
8.3. DIPSW の設定	34
8.4. CPU の設定	34
8.5. バンクポート設定 (2 サイクル DMA)	34
8.6. バンクポート設定 (フライバイ DMA)	35
8.7. モニタ使用時	35
9. CPU 端子接続	36
9.1. 一覧	36
9.2. RESET-	37
9.3. NMI	38
9.4. INTP130/P34	39
9.5. MODE0 ~ MODE2,CKSEL	40

9.6.	MODE3/VPP,P21	41
9.7.	X1,X2.....	41
9.8.	P22 ~ P27	41
9.9.	ANIO/P70 ~ ANI7/P77,AVDD,AVSS,AVREF	42
9.10.	ポート (タイプ 1)	42
9.11.	ポート (タイプ 2)	43
9.12.	ポート (タイプ 3)	43
10.	CPU 内蔵フラッシュROM 書き込み	45
10.1.	スイッチの設定	45
10.2.	通信方式.....	45
10.3.	書き込み手順.....	45
10.4.	注意事項.....	45
11.	バス・サイクル	46
11.1.	タイムオーバ・レディー	46
11.2.	SIMM インターフェース	47
11.2.1.	概要	47
11.2.2.	信号の説明.....	47
11.2.3.	リード・サイクル.....	47
11.2.4.	ライト・サイクル.....	48
12.	ソフトウェア	48
12.1.	CPU 設定	48
12.2.	CS 空間設定	48
12.2.1.	CS0/CS7 空間 (SRAM/ROM)	49
12.2.2.	CS2 空間 (EDO-DRAM)	49
12.2.3.	CS3 空間 (SIMM)	49
12.2.4.	CS6 空間ウェイト	49
12.2.5.	CS6 空間コマンド・リカバリ・タイム	49
12.3.	ライブラリ	50
12.4.	タイマの使用法	50
13.	マスカブル割り込みを使用したアプリケーションの開発	53
13.1.	割り込みベクタ	53
13.2.	一般的な制限事項 / 注意事項	54
13.3.	ブレーク・ポイント使用に関する制限事項 / 注意事項	54
14.	APPENDIX.A MULTI モニタ	55
14.1.	ボードの設置	55
14.1.1.	RTE for Win32 のインストール	55
14.1.2.	ディップ・スイッチ 1 (SW1)	55
14.1.3.	ディップ・スイッチ 2 (SW2)	55
14.1.4.	ディップ・スイッチ 3 (SW3)	55

14.1.5.	デイップ・スイッチ4 (SW4)	55
14.1.6.	デイップ・スイッチ5 (SW5)	55
14.1.7.	デイップ・スイッチ6 (SW6)	55
14.1.8.	デイップ・スイッチ7 (SW7)	55
14.1.9.	JP2	56
14.1.10.	AVDD 切り替えジャンパ (JP3)	56
14.1.11.	ROM 容量切り替えジャンパ (JP5)	56
14.1.12.	TIC 供給クロック切り替えジャンパ (JP6)	56
14.1.13.	ボードの接続	56
14.2.	MULTI モニタ	57
14.2.1.	起動時の 7Seg-LED	57
14.2.2.	ROM モニタ・ワーク RAM	57
14.2.3.	_INIT_SP の設定	57
14.2.4.	リモート接続	57
14.2.5.	タイマ割り込み	57
14.2.6.	ハードウェアの初期化	57
14.2.7.	特殊命令	57
14.3.	RTE コマンド	58
14.3.1.	HELP(?)	58
14.3.2.	INIT	58
14.3.3.	VER	58
14.3.4.	SFR コマンド	58
15.	APPENDIX.B PARTNER モニタ	59
15.1.	ボードの設置	59
15.1.1.	デイップ・スイッチ1 (SW1)	59
15.1.2.	デイップ・スイッチ2 (SW2)	59
15.1.3.	デイップ・スイッチ3 (SW3)	59
15.1.4.	デイップ・スイッチ4 (SW4)	59
15.1.5.	デイップ・スイッチ5 (SW5)	59
15.1.6.	デイップ・スイッチ6 (SW6)	59
15.1.7.	デイップ・スイッチ7 (SW7)	60
15.1.8.	JP2	60
15.1.9.	AVDD 切り替えジャンパ (JP3)	60
15.1.10.	ROM 容量切り替えジャンパ (JP5)	60
15.1.11.	TIC 供給クロック切り替えジャンパ (JP6)	60
15.1.12.	ボードの接続	60
15.2.	PARTNER モニタ	61
15.2.1.	起動時の 7Seg-LED	61
15.2.2.	ROM モニタ・ワーク RAM	61
15.2.3.	強制ブレーキ用の割り込み	61
15.2.4.	SP の設定	61
15.2.5.	リモート接続	61

15.2.6.	ハードウェアの初期化.....	61
15.2.7.	特殊命令	61

1. はじめに

『RTE-V850E/MS1-PC』は、日本電気社製 CPU V850E/MS1 の評価を目的とした評価ボードで RS-232-C インターフェースと ISA バスのインターフェースを持っています。

評価プログラムの開発 / デバッグや CPU のパフォーマンス評価などを RS-232-C または ISA スロットに実装してご使用いただけます。

本製品は、開発用のソフトウェアツールとして GHS 社の Multi と自社製の PARTNER のどちらかをソースレベルデバッガとしてご使用になります。ご使用になるデバッガによって、ROM に搭載するモニタが異なります。

ROM は、購入時にご指定されたモニタが搭載されています。デバッガを同時に購入されていない場合は、それぞれ別売りされていますので、別途お買い求めください。

1.1. マニュアル表記について

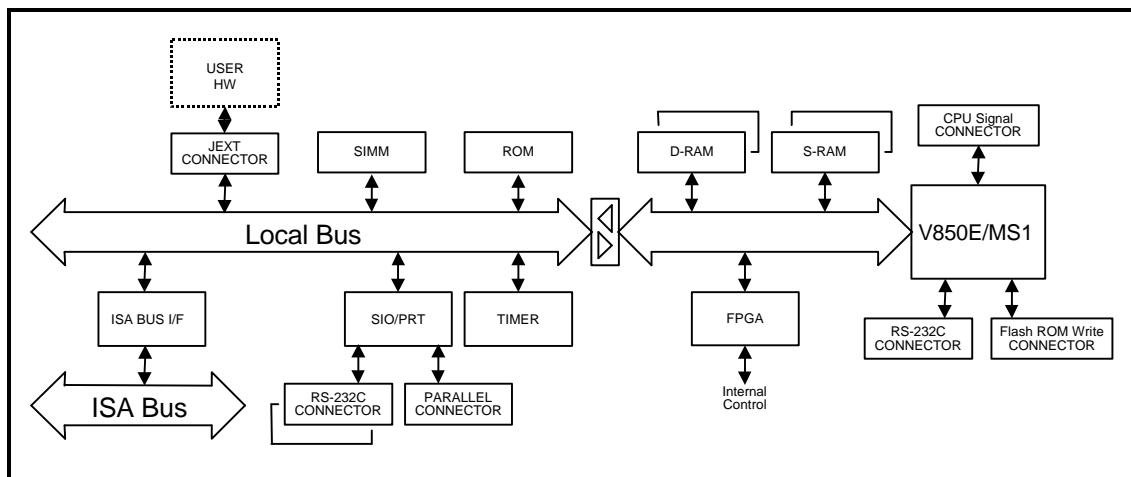
本書では、数字の表記については表の表記を用います。16 進数や 2 進数の表記では、桁数が多くて読みにくい場合は、4 桁ごとに“-”（ハイフン）を入れてあります。

進数	表記規則	例
10 進数	数字のみを示します	“10”は 10 進数の“10”を示します
16 進数	数字の末尾に”H”を記します	“10H”は 10 進数の“16”を示します
2 進数	数字の末尾に”B”を記します	“10B”は 10 進数の“2”を示します

数字表記規則

2. 特徴と機能

RTE-V850E/MS1-PC の機能ブロックの概要を以下の図に示します。



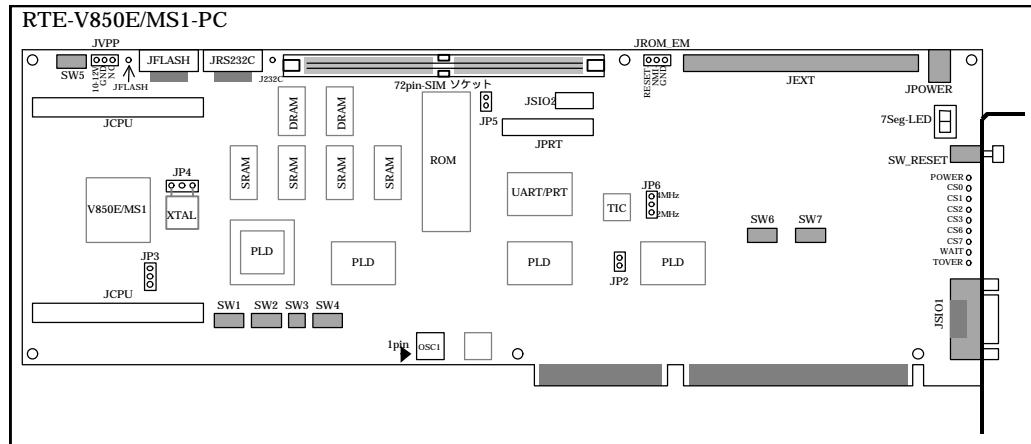
RTE-V850E/MS1-PC ブロック図

特徴

- ◊ ROM 標準 128K バイト (64K × 16 ビット EPROM × 1)
最大 512K バイト (256K × 16 ビット EPROM × 1)
- ◊ SRAM 512K バイト (64K × 16 ビット SRAM × 4)
- ◊ DRAM 4M バイト (2M × 8 ビット EDO-DRAM × 2)
- ◊ SIMM SIMM72 ピン・ソケット × 1 枚により 4M,8M (SIMM はオプション)
通常タイプの DRAM-SIMM に加え、EDO タイプの DRAM-SIMM も使用可能
- ◊ RS-232C ポート (D-SUB 9 ピン × 1、2.54mm ピンヘッダ 10 ピン × 2)
- ◊ パラレルポート (2.54mm ピンヘッダ 26 ピン × 1)
- ◊ PC/AT 互換機の ISA バスによる通信機能
- ◊ ユーザー拡張用のローカル・バスのコネクタ
- ◊ CPU の信号を計測できるプロセッサ・ピンコネクタ
- ◊ 外部リセット・スイッチをリアパネルに用意
- ◊ ROM インサーキット・デバッガ用の接続ピン
- ◊ CPU 内蔵フラッシュ ROM 書き込み用コネクタ
- ◊ CPU 内蔵の UART 機能を使用した RS232C コネクタ

3. ボードの構成

RTE-V850E/MS1-PC ボード上の主要な部品の物理的配置を以下の図に示します。



RTE-V850E/MS1-PC 概観

3.1. ディップ・スイッチ

RTE-V850E/MS1-PC は、SW1～SW7 の 7 つのディップ・スイッチがあります。それぞれのディップスイッチの機能と出荷時の設定を以下で説明します。

3.1.1. ディップ・スイッチ1 (SW1)

DIPSW1 は EXT-BUS の DMA 関係の設定を行います。

No.	記号	Def.	機能
1	EXDMA0 ^{*1}	OFF	OFF:CPU の INTP100/DMARQ0-/P04 端子と、INTP110/DMAAK0-/P14 端子が EXT-BUS の DMA 以外の用途で使用できます。 ON :CPU の INTP100/DMARQ0-/P04 端子と、INTP110/DMAAK0-/P14 端子が EXT-BUS の DMA で使用されます。
2	EXDMA0 ^{*1}	OFF	OFF:CPU の INTP101/DMARQ1-/P05 端子と、INTP111/DMAAK1-/P15 端子が EXT-BUS の DMA 以外の用途で使用できます。 ON :CPU の INTP101/DMARQ1-/P05 端子と、INTP111/DMAAK1-/P15 端子が EXT-BUS の DMA で使用されます。
3	EXDMA1 ^{*2}	OFF	
4	EXDMA1 ^{*2}	OFF	OFF:CPU の CS5-/RAS5-/IORD-/P85 端子が EXT-BUS の DMA 以外の用途で使用できます。 ON :CPU の CS5-/RAS5-/IORD-/P85 端子が EXT-BUS の DMA で IORD-として使用されます。
5	PDMA	OFF	
6	PDMA	OFF	システムで予約されています。OFF で用いてください。
7	IORD- ^{*3}	OFF	
8	IOWR- ^{*3}	OFF	OFF : CPU の CS4-/RAS4-/IOWR-/P84 端子が EXT-BUS の DMA 以外の用途で使用できます。 ON : CPU の CS4-/RAS4-/IOWR-/P84 端子が EXT-BUS の DMA で IOWR-として使用されます。

*1 : EXT-BUS で DMA0 を使用する場合は、1 番と 2 番を ON にしてください。

*2 : EXT-BUS で DMA1 を使用する場合は、3 番と 4 番を ON にしてください。

*3 : EXT-BUS で DMA を使用する場合は、7 番と 8 番を ON にしてください。

3.1.2. ディップ・スイッチ2 (SW2)

DIPSW2 は割り込み関係の設定を行います。

No.	記号	Def.	機能
1	NMI	ON	OFF : CPU の NMI/P20 端子が NMI 生成回路からの NMI 以外の用途で使用できます。 ON : CPU の NMI/P20 端子に NMI 生成回路からの NMI が接続されます。
2	INTP130	OFF	OFF : CPU の INTP130/P34 端子が INTP130 生成回路からの INTP130 以外の用途で使用できます。 ON : CPU の INTP130/P34 端子に INTP130 生成回路からの INTP130 が接続されます。
3	I_UART0	OFF	OFF : CPU の INTP131/SO2/P35 端子が TL16PIR552 の UART0 割り込み以外の用途で使用できます。 ON : CPU の INTP131/SO2/P35 端子に TL16PIR552 の INTRPT0 端子 (UART0 割り込み) が接続されます。
4	I_UART1	OFF	OFF : CPU の INTP132/SI2/P36 端子が TL16PIR552 の UART1 割り込み以外の用途で使用できます。 ON : CPU の INTP132/SI2/P36 端子に TL16PIR552 の INTRPT1 端子 (UART1 割り込み) が接続されます。
5	I_PRT	OFF	OFF : CPU の INTP133/SCK2-/P37 端子が TL16PIR552 の PRINTER 割り込み以外の用途で使用できます。 ON : CPU の INTP133/SCK2-/P37 端子に TL16PIR552 の PINTR-端子 (PRINTER 割り込み) が接続されます。
6	I_TMR1	OFF	OFF : CPU の INTP140/P114 端子が TIC(μPD71054)のタイマ1 割り込み以外の用途で使用できます。 ON : CPU の INTP140/P114 端子に TIC(μPD71054)の TOUT1 端子 (タイマ1 割り込み) が接続されます。
7	I_ISA	OFF	システムで予約されています。OFFで用いてください。
8	未使用	OFF	

3.1.3. ディップ・スイッチ3 (SW3)

DIPSW3 は EXT-BUS の割り込みの設定を行います。

No.	記号	Def.	機能
1	EXINT0	OFF	OFF : CPU の INTP150/P124 端子が EXT-BUS からの割り込み以外の用途で使用できます。 ON : CPU の INTP150/P124 端子に EXT-BUS の INT0 が接続されます。
2	EXINT1	OFF	OFF : CPU の INTP151/P125 端子が EXT-BUS からの割り込み以外の用途で使用できます。 ON : CPU の INTP151/P125 端子に EXT-BUS の INT1 が接続されます。
3	EXINT2	OFF	OFF : CPU の INTP152/P126 端子が EXT-BUS からの割り込み以外の用途で使用できます。 ON : CPU の INTP152/P126 端子に EXT-BUS の INT2 が接続されます。
4	EXINT3	OFF	OFF : CPU の INTP153/P127 端子が EXT-BUS からの割り込み以外の用途で使用できます。 ON : CPU の INTP153/P127 端子に EXT-BUS の INT3 が接続されます。

3.1.4. ディップ・スイッチ4 (SW4)

DIPSW4 は SIMM の種類およびタイムオーバー Ready の設定を行います。

No.	記号	Def.	機能
1	FLS_WP	OFF	システムで予約されています。OFFで用いて下さい。
2	FLS_VPP	OFF	システムで予約されています。OFFで用いて下さい。
3	TOVEN ^{*1}	ON	OFF : 一定期間バスサイクルが終了しなくともタイムオーバー Ready は発生しません。 ON : 一定期間バスサイクルが終了しない場合、タイムオーバー Ready を発生させてバスサイクルを終了させます。
4	SIMMEDO ^{*2}	OFF	OFF : SIMM が EDO タイプではない時設定します。 ON : SIMM が EDO タイプの時設定します。
5	NMI/130	OFF	システムで予約されています。OFFで用いて下さい。
6	未使用	OFF	
7	未使用	OFF	
8	未使用	OFF	

*1 : タイムオーバー Ready については『11.1 タイムオーバー・レディー』を参照してください。

*2 : このスイッチの設定によりハードウェア的な切り替えは行なわれていません。このスイッチの内容は、モニタが読み出して CPU 内の DRAM コントローラの初期化に使用しています。

3.1.5. ディップ・スイッチ5 (SW5)

DIPSW5 は CPU の端子の状態を設定します。

No.	記号	Def.	機能
1	MODE0	ON	OFF : CPU の MODE0 端子を High にします。 ON : CPU の MODE0 端子を Low にします。
2	MODE1	ON	OFF : CPU の MODE1 端子を High にします。 ON : CPU の MODE1 端子を Low にします。
3	MODE2	ON	OFF : CPU の MODE2 端子を High にします。 ON : CPU の MODE2 端子を Low にします。
4	CKSEL	ON	OFF : CPU の CKSEL 端子を High にします (ダイレクト・モード)。 ON : CPU の CKSEL 端子を Low にします (PLL モード)。
5	M3_NML	ON	システムで予約されています。ON で用いてください。
6	M3_HI	OFF	システムで予約されています。OFF で用いてください。
7	J232C	OFF	J232C と JFLASH の組み合わせで次のようにになります。 [J232C, JFLASH] [OFF, OFF] CPU の P22 ~ P27 端子を下記以外の目的で使用できます。 [ON, OFF] CPU の P22 ~ P27 端子が JRS232C コネクタに接続され、JRS232C コネクタが有効になります (J232C-LED が点灯します)。 [X, ON] ライタを用いた CPU 内蔵フラッシュ ROM の書き込みモードになり、JFLASH コネクタが有効になります (JFLASH-LED が点灯します)。
8	JFLASH	OFF	

3.1.6. ディップ・スイッチ6 (SW6)

DIPSW6 は ISA バスの I/O アドレスを設定します。スイッチの番号 1 ~ 8 が ISA バスのアドレス A4 ~ A11 に対応しています (A12 ~ A15 は 0 に固定)。したがって、I/O アドレスとして 000xH ~ 0FFxH のいずれかに割り当てることができます。スイッチは、OFF で対応するアドレスが 1、ON で対応するアドレスが 0 になります。デフォルトの設定は、0200H 番地です。

No.	記号	Def.	機能
1	A4	ON	ISA バスの I/O アドレスを設定します (OFF=1, ON=0)。
2	A5	ON	
3	A6	ON	
4	A7	ON	
5	A8	ON	
6	A9	OFF	
7	A10	ON	
8	A11	ON	

3.1.7. ディップ・スイッチ7 (SW7)

CPU から汎用ポート経由で読み出すことのできるスイッチです。モニタを使用する場合は、一部のビットが予約されています。詳細はご使用するモニタに該当する付録の章を参照してください。

3.2. ジャンパ・スイッチ

RTE-V850E/MS1-PC は、JP2,JP3,JP5,JP6 の 4 つのジャンパ・スイッチがあります。以下にそれぞれのジャンパ・スイッチの機能を説明します。

3.2.1. JP2

JP2 はシステム予約です。オープン状態で用います。

3.2.2. AVDD 切り替えジャンパ(JP3)

JP3 は、CPU の AVDD 端子に供給する電源を切り替えます (『9.9ANI0/P70 ~ ANI7/P77,AVDD,AVSS,AVREF』参照)。

JP3 設定	内容
1pin - 2pin ショート	CPU の AVDD ピンに CPU の HVDD 端子と同じ電源(+5V)が接続されます。 (出荷時の設定)
2pin - 3pin ショート	CPU の AVDD ピンに JCPU コネクタからの AVDD 信号が接続されます。

 CPU の AVSS 端子は、JP3 の裏側にある R1 抵抗(0Ω)を経由して GND に接続されています。AVSS 端子を GND からアイソレートして、JCPU コネクタから AVSS を与える場合は、R1 抵抗を外してください。

3.2.3. ROM 容量切り替えジャンパ(JP5)

JP5 は実装する ROM の容量によって切り替えるジャンパです。

JP5 設定	内容
1pin - 2pin オープン	128K バイト (64K × 16 ピット) と 256K バイト (128K × 16 ピット) の ROM を実装する場合。(出荷時の設定)
1pin - 2pin ショート	512K バイト (256K × 16 ピット) の ROM を実装する場合。

3.2.4. TIC 供給クロック切り替えジャンパ(JP6)

JP6 は TIC(μPD71054)のカウンタ#1 と#2 に供給するクロックを切り替えるジャンパです(『6.3TIC (uPD71054) (3F-F040H ~ 3F-F048H)』参照)。

JP6 設定	内容
1pin - 2pin ショート	TIC のカウンタ#1 と#2 のクロックに 2MHz を供給します。(出荷時の設定)
2pin - 3pin ショート	TIC のカウンタ#1 と#2 のクロックに 4MHz を供給します。

3.3. スイッチ

RTE-V850E/MS1-PC は、スイッチとして SW_RESET スイッチがあります。

3.3.1. リセット・スイッチ(SW_RESET)

SW_RESET はリセット・スイッチです。このスイッチを押すと CPU およびボード全体がリセットされます (『9.2RESET-』参照)。

3.4. LED

RTE-V850E/MS1-PC の各種 LED の機能を説明します。

LED の名称	内容
POWER	ボードの電源が入っている時に点灯します。
CS0	CPU の CS0-端子が Low の時に点灯します。
CS1	CPU の CS1-端子が Low の時に点灯します。
CS2	CPU の CS2-端子が Low の時に点灯します。
CS3	CPU の CS3-端子が Low の時に点灯します。
CS4	CPU の CS4-端子が Low の時に点灯します。
CS5	CPU の CS5-端子が Low の時に点灯します。
CS6	CPU の CS6-端子が Low の時に点灯します。
CS7	CPU の CS7-端子が Low の時に点灯します。
WAIT	CPU の WAIT-端子が Low の時に点灯します。
TOVER	タイムオーバー Ready が発生した時に点灯します。
JFLASH	JFLASH コネクタが有効な時に点灯します。
J232C	JRS232C コネクタが有効な時に点灯します。
7Seg-LED	汎用ポートに出力した内容により点灯させることができます (『6.47 セグメント LED 表示データ出力ポート(3D8-0050H [Write Only])』参照)。

3.5. コネクタ、ソケット類

RTE-V850E/MS1-PC の各種コネクタおよびソケットについて説明します。

3.5.1. 電源コネクタ (JPOWER)

本ボードを ISA バス・スロットに挿さずに単体で使用する場合には、JPOWER コネクタに外部電源を接続して電源を供給します。

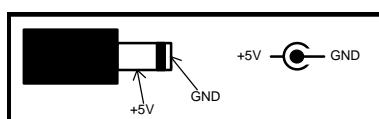
JPOWER コネクタに供給する電源は、以下の通りです。

電圧 : 5 V

電流 : 最大 2 A (ただし、JEXT コネクタへの供給分を含まず)

適合コネクタ : Type A (5.5)

極性 :



電源コネクタの極性に十分ご注意ください

また、ISA バス・スロットに挿して本ボードを使用する場合には、JPOWER に電源を接続しないでください。

3.5.2. クリスタル・ソケット (JP4)

JP4 は、CPU に供給するクロックの切り替えの役割と、クリスタルの実装用ソケットの役割を持っています (『9.7X1,X2』参照)。

JP4 設定	内容
X1pin - X2pin 間にクリスタルを実装	CPU の X1 端子と X2 端子に実装したクリスタルが接続されます。
X1pin と JP4 の中央ピンをショート	CPU の X1 端子に OSC1 ソケットに実装したオシレータの出力が接続されます。

3.5.3. オシレータ・ソケット(OSC1)

OSC1 ソケットには、CPU に供給するクロック用のオシレータを実装します。

CPU への供給クロックは、JP4 によって、JP4 上に実装したクリスタルを使用することもできます (『9.7X1,X2』参照)

OSC1 ソケットには、DIP8 ピンタイプ (ハーフタイプ) の 5V 用オシレータを実装してください。



オシレータを実装する場合は、1 番ピンの位置に十分ご注意ください。オシレータの足が短すぎると、オシレータのフレーム(外装)部分がソケットの端子とショートしてしまうことがありますのでご注意願います。

3.5.4. DRAM-SIMM ソケット

DRAM-SIMM ソケットには 4M,8M バイトの 72 ピン SIMM (PC/AT 互換機用として用いられるもので、ロウ・アドレス / カラム・アドレスのビット幅の等しい DRAM を搭載し、RAS-信号が独立した SIMM) が実装できます。また、通常タイプの DRAM-SIMM に加え、EDO タイプの DRAM-SIMM を使用することができます。実装されている SIMM の容量は PIO ポートから読み出すことができます (『6.6Status 読み出しポート(3D8-0060H [Read Only])』参照)



16M,32M バイトタイプの SIMM は使用できません。

3.5.5. ROM ソケット

ROM ソケットには、標準で 128K バイト (64K × 16 ピット) の 40 ピン ROM が実装されています。ROM は、アクセス・タイムが 120ns 以下のものをご使用ください。異なる容量の ROM を実装する場合は、ボード上の JP5 の切り替えが必要な場合があります (『3.2.3ROM 容量切り替えジャンパ (JP5)』参照)

3.5.6. セルフ書き込み電源供給用コネクタ(JVPP)

CPU 内蔵のフラッシュ ROM にセルフ書き込みを行う場合、7.5V の電源が必要になります。この 7.5V の電源を生成するための電源を供給するのが、JVPP コネクタです。

このコネクタに 10V ~ 12V の電源を供給し、CPU の P21 端子に Low を出力すると、CPU の VPP 端子に 7.5V が供給されます (『9.6MODE3/Vpp,P21』参照)

JVPP のピン配置を以下に示します。

JVPP ピン番号	名称	入出力	機能
1	10-12V	入力	10V ~ 12V の電源を入力します。
2	GND	入力	電源の GND に接続します。
3	NC		未接続です。

3.5.7. ROM エミュレータ用コネクタ(JROM_EM)

JROM_EM は、ROM インサーキット型のデバッガを接続する際に使用するコネクタです。ROM インサーキット・デバッガからの制御信号が入力できます。

下表に信号名と機能を示します。

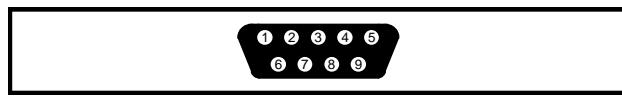
JROM_EM ピン番号	名称	入出力	機能
1	RESET-	入力	ROM インサーキット・デバッガからのリセット要求信号を接続。Low レベル入力により、CPU がリセットされます。本ボード内で 1K ブルアップされています。（『9.2RESET-』参照）
2	NMI-	入力	ROM インサーキット・デバッガからの NMI 要求信号（ブレーク要求）を接続。Low レベル入力により、CPU に NMI が入ります。本ボード内で 1K ブルアップされています。（『9.3NMI』参照）
3	GND	- - -	ROM インサーキット・デバッガの GND と接続。GND です。

3.5.8. シリアル・コネクタ(JSIO1,JSIO2)

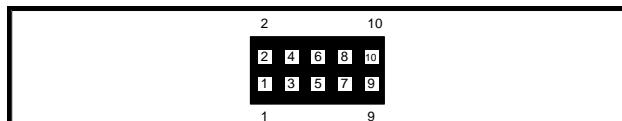
JSIO1,JSIO2 コネクタは、シリアル・コントローラ（TL16PIR552）によって制御される RS-232C 用のコネクタです。コネクタの形状は、JSIO1 は PC/AT 互換機で用いられる一般的な D-SUB9 ピンの RS-232C コネクタで、JSIO2 は 2.54mm ピッチのピンヘッダ型コネクタです。何れも、全ての信号は RS-232C レベルに変換されています。コネクタのピン番号と内容は図と表の通りです。

表には、ホストと接続する場合の接続信号について、ホスト側が D-SUB9 ピンの場合と D-SUB25 ピンの場合の布線をそれぞれ示してあります（一般的なクロスケーブルの布線です）。

また、JSIO2 のピン配置はリボンケーブルに対して圧接型コネクタを使用した場合、JSIO1 のピン配置と同じになるようになっています。



JSIO1 ピン配置



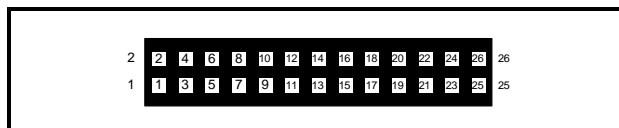
JSIO2 ピン配置

JSIO1 ピン番号	JSIO2 ピン番号	信号名	入出力	ホストの接続ピン番号	
				D-SUB9	D-SUB25
1	1	DCD	入力		
2	3	RxD(RD)	入力	3	2
3	5	TxD(SD)	出力	2	3
4	7	DTR(DR)	出力	1, 6	6, 8
5	9	GND		5	7
6	2	DSR(ER)	入力	4	20
7	4	RTS(RS)	出力	8	5
8	6	CTS(CS)	入力	7	4
9	8	RI	入力		
--	10	NC			

3.5.9. パラレル・コネクタ (JPRT)

JPRT コネクタは、パラレル (プリンタ)・コントローラ (TL16PIR552) によって制御されるパラレル用のコネクタです。コネクタの形状は、2.54mm ピッチのピンヘッダ型コネクタです。何れも、全ての信号は 5V レベルです。コネクタのピン番号と内容は図と表の通りです。

また、JPRT のピン配置はリボンケーブルに対して圧接型コネクタを使用した場合、PC/AT 互換機で用いられている一般的な D-SUB25 ピンのピン配置と同じになるようになっています。



JPRT ピン配置

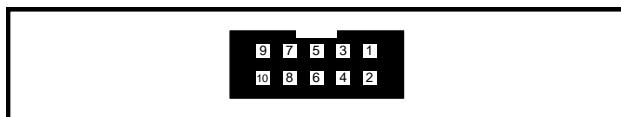
JPRT ピン番号	信号名	JPRT ピン番号	信号名
1	STB-	2	AUTO_FD-
3	D0	4	ERROR-
5	D1	6	INIT-
7	D2	8	SELECT_IN-
9	D3	10	GND
11	D4	12	GND
13	D5	14	GND
15	D6	16	GND
17	D7	18	GND
19	ACK-	20	GND
21	BUSY	22	GND
23	PE	24	GND
25	SELECT	26	NC

3.5.10. シリアル・コネクタ (JRS232C)

JRS232C コネクタは、CPU の内蔵 UART によって制御される RS-232C 用のコネクタです(『9.8P22 ~ P27』参照)。コネクタの形状は、2.54mm ピッチのピンヘッダですが、リボンケーブルに対して圧接型コネクタを使用した場合、ピン配置が PC/AT 互換機で用いられる一般的な D-SUB9 ピンの RS-232C コネクタと同じになっています。全ての信号は RS-232C レベルに変換されています。

JRS232C を使用する場合は、SW5 の設定が必要です(『3.1.5ディップ・スイッチ5 (SW5)』参照)。JRS232C が使用可能な場合は、J232C-LED が点灯します(『3.4LED』参照)。

JRS232C コネクタのピン配置を図と表に示します。また、パーソナル・コンピュータ (ホスト) などと接続する場合の布線は、『3.5.8シリアル・コネクタ (JSIO1,JSIO2)』の表を参照してください。



JRS232C ピン配置

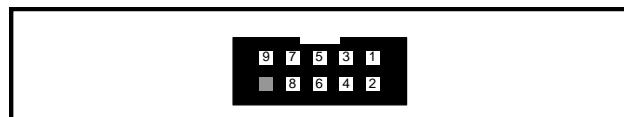
JRS232C ピン番号	信号名	入出力	対応 CPU 端子
1	NC	入力	
3	RxD(RD)	入力	P23
5	TxD(SD)	出力	P22
7	DTR(DR)	出力	P27
9	GND		
2	DSR(ER)	入力	P24
4	RTS(RS)	出力	P25
6	CTS(CS)	入力	P26
8	NC		
10	NC		

3.5.11. フラッシュ書き込みコネクタ (JFLASH)

JFLASH コネクタは、CPU の内蔵のフラッシュ ROM ヘライタを使用して書き込む時に、ライタを接続するためのコネクタです。このコネクタには弊社のフラッシュライタFP-100 が直接接続できます。

JFLASH を使用する場合は、SW5 の設定が必要です (『3.1.5 ディップ・スイッチ 5 (SW5)』参照)。JFLASH が使用可能な場合は、JFLASH-LED が点灯します (『3.4 LED』参照)。

フラッシュ ROM の書き込みの詳細については『10CPU 内蔵フラッシュ ROM 書き込み』を参照してください。



JFLASH ピン配置

JFLASH ピン番号	信号名	入出力	備考
1	SO0	出力	同期シリアルデータ出力 (CMOS レベル)
2	SI0	入力	同期シリアルデータ入力 (CMOS レベル)
3	SCK0-	入力	同期シリアルクロック入力 (CMOS レベル)
4	RESET-	入力	リセット入力
5	VPP	入力	VPP 入力
6	+3.3V	出力	CPU コア電源レベル出力
7	+5V	出力	CPU-I/O 電源レベル出力
8	GND	-	グランド
9	NC	-	未接続
(10)	NC	-	未接続 (ピン無し)

3.5.12. プロセッサ・ピンコネクタ (JCPU)

CPU の端子が接続されているコネクタです。ボード内の接続については『9CPU 端子接続』を参照してください。

JCPU ピン番号	信号名	JCPU ピン番号	信号名
1	GND	2	INTP142/SI3/P116
3	INTP141/SO3/P115	4	INTP140/P114
5	TI14/P113	6	TCLR14/P112
7	TO141/P111	8	TO140/P110
9	+3.3V	10	未接続
11	+3.3V	12	JX1 ^{*1}
13	GND	14	CKSEL
15	MODE0	16	MODE1
17	MODE2	18	MODE3/VPP
19	RESET-	20	INTP153/ADTRG/P127
21	+5V	22	INTP152/P126
23	INTP151/P125	24	INTP150/P124
25	TI15/P123	26	TCLR15/P122
27	TO151/P121	28	TO150/P120
29	CLKOUT/PX7	30	WAIT-/PX6
31	GND	32	REFRQ-/PX5
33	JCPU_WAIT- ^{*2}	34	HLDRQ-/P97
35	HLDAK-/P96	36	OE-/P95
37	ADV-/BCYST-/P94	38	WE-/P93
39	RD-/P92	40	UCAS-/UWR-/P91
41	+3.3V	42	LCAS-/LWR-/P90
43	CS7-/RAS7-/P87	44	CS6-/RAS6-/P86
45	CS5-/RAS5-/IORD-/P85	46	CS4-/RAS4-/IOWR-/P84
47	CS3-/RAS3-/P83	48	CS2-/RAS2-/P82
49	CS1-/RAS1-/P81	50	CS0-/RAS0-/P80
51	+5V	52	+5V
53	A23/P67	54	A22/P66
55	A21/P65	56	A20/P64
57	A19/P63	58	A18/P62
59	A17/P61	60	A16/P60
61	GND	62	A15/PB7
63	A14/PB6	64	A13/PB5
65	A12/PB4	66	A11/PB3
67	A10/PB2	68	A9/PB1
69	A8/PB0	70	GND
71	+3.3V	72	A7/PA7
73	A6/PA6	74	A5/PA5
75	A4/PA4	76	A3/PA3
77	A2/PA2	78	A1/PA1
79	A0/PA0	80	+5V

*1 : OSC1 ソケットに実装されているオシレータの出力が 3.3V レベルに変換されて出力されています (『9.7X1,X2』参照)。

*2 : JCPU コネクタからの WAIT-の入力です。JCPU コネクタ経由でバスサイクルにウェイトを挿入する時に使用します。

JCPU ピン番号	信号名	JCPU ピン番号	信号名
81	GND	82	D15/P57
83	D14/P56	84	D13/P55
85	D12/P54	86	D11/P53
87	D10/P52	88	D9/P51
89	D8/P50	90	GND
91	+3.3V	92	D7/P47
93	D6/P46	94	D5/P45
95	D4/P44	96	D3/P43
97	D2/P42	98	D1/P41
99	D0/P40	100	+3.3V
101	+5V	102	INTP103/DMARQ3-/P07
103	INTP102/DMARQ2-/P06	104	INTP101/DMARQ1-/P05
105	INTP100/DMARQ0-/P04	106	TI10/P03
107	TCLR10/P02	108	TO101/P01
109	TO100/P00	110	GND
111	GND	112	INTP113/DMAAK3-/P17
113	INTP112/DMAAK2-/P16	114	INTP111/DMAAK1-/P15
115	INTP110/DMAAK0-/P14	116	TI11/P13
117	TCLR11/P12	118	TO111/P11
119	TO110/P10	120	INTP123/TC3-/P107
121	+3.3V	122	INTP122/TC2-/P106
123	INTP121/TC1-/P105	124	INTP120/TC0-/P104
125	TI12/P103	126	TCLR12/P102
127	TO121/P101	128	TO120/P100
129	ANI7/P77	130	ANI6/P76
131	+5V	132	ANI5/P75
133	ANI4/P74	134	ANI3/P73
135	ANI2/P72	136	ANI1/P71
137	ANI0/P70	138	AVDD ^{*3}
139	AVSS ^{*3}	140	AVREF
141	GND	142	NMI/P20
143	P21	144	TXD0/S00/P22
145	RXD0/S10/P23	146	SCK0-/P24
147	TXD1/S01/P25	148	RXD1/S11/P126
149	SCK1-/P27	150	+3.3V
151	+3.3V	152	INTP133/SCK2-/P37
153	INTP132/SI2/P36	154	INTP131/SO2/P35
155	INTP130/P34	156	TI13/P33
157	TCLR13/P32	158	TO131/P31
159	TO130/P30	160	INTP143/SCK3-/P117

*3 : AVDD,AVSS と CPU の接続については、『9.9ANI0/P70 ~ ANI7/P77,AVDD,AVSS,AVREF』を参照して下さい。

3.6. 拡張バス・コネクタ (JEXT)

JEXT コネクタは、メモリや I/O などを拡張できるように用意されたコネクタです。このコネクタには、本ボードの内部のローカル・バスが接続されています。このコネクタの詳細については『7EXT-BUS バス仕様』を参照してください。

4. ホストPCとの接続

4.1. ISAバス・スロットに組み込んで使用する場合の手順

ボードをPCのISAバス・スロットに組み込むと、ISAバスからボードへ電源(+5V)が供給されます。また、デバッガとの通信にISAバス経由が使用できるため、プログラムの高速なダウンロードが実現できます。

ISAバス・スロットへの組み込み手順は、以下ようになります。

ボード上のディップ・スイッチにより、RTE-V850E/MS1-PCが使用するPCのI/Oアドレスを設定します。I/Oアドレスは他のI/Oと重ならないように注意してください。スイッチの設定については『3.1.6ディップ・スイッチ6(SW6)』を参照ください。

PCの電源を切って筐体をあけ、ボードを実装するISAバス・スロットを確認します。実装するスロットにリアパネルが付いている場合は、そのリアパネルを外します。

ボードをISAバス・スロットに差し込み、ボードが隣接の他のボードなどと接触していないかを確認し、ボードに付いているリアパネルをPCの筐体にネジで固定します。

PCの電源を入れ、ボードのPOWER-LEDが点灯することを確認します。**LEDが点灯しない場合は、すぐにPCの電源を切り接続を確認してください。**

ホストマシンでデバッガを起動して、ISAバス経由でコネクトします。エラーが発生する場合には、ボードの実装やソフトウェアのインストールに間違いがないかを確認してください。

4.2. ボード単体で使用する場合の手順

PCに組み込みず、ボード単体で使用する場合は、外部からの電源供給が必要となります。また、デバッガとの通信もRS-232C経由のみとなります。

ボードを単体で使用する場合の手順は以下の通りです。

ホストと接続するためのシリアルケーブルと、電源供給のための外部電源(+5V 2A)を用意してください。特に電源については、電圧と**コネクタの極性**に注意してください。また、ボードの4隅にスペーサを取り付けるなど、設置場所にも問題がないようにしてください。RS-232Cケーブルの結線は『3.5.8シリアル・コネクタ(JSIO1,JSIO2)』、電源コネクタについては、『3.5.1電源コネクタ(JPOWER)』を参照してください。

ボード上のディップ・スイッチで、RS-232Cのボーレートを設定します。スイッチの設定については各モニタの章を参照してください。

ホストとRS-232Cケーブルで接続して、JPOWERコネクタに電源を接続し、ボードのPOWER-LEDが点灯することを確認します。**LEDが点灯しない場合は、すぐに電源を切り接続を確認してください。**

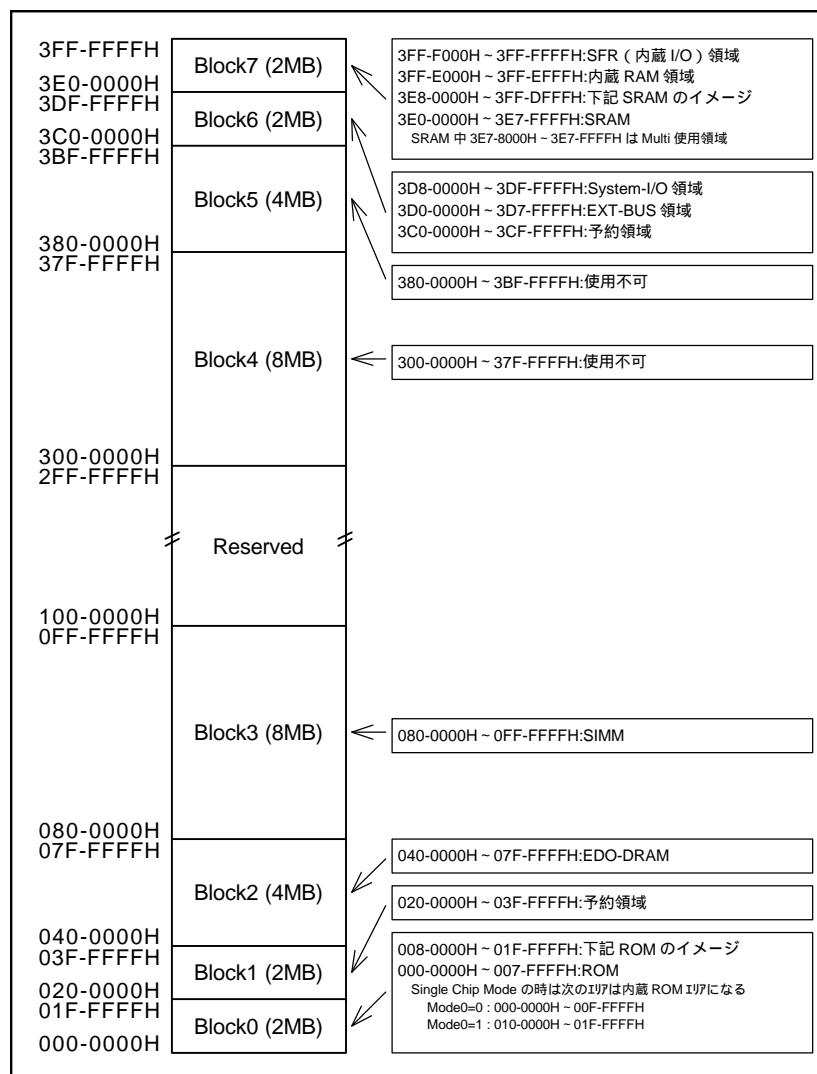
ホストマシンでデバッガを起動して、RS-232C経由でコネクトします。エラーが発生する場合には、シリアルケーブルやスイッチ(特にボーレート)の設定に間違いがないかを確認してください。

5. ハードウェア・リファレンス

ここでは、RTE-V850E/MS1-PC ボードのハードウェアについて記述します。

5.1. メモリ・マップ概要

ボードのメモリ割り付けは、以下の通りです。



メモリ・マップ

5.2. メモリ・マップ詳細

メモリ・マップの詳細を以下に示します。各メモリ空間をアクセスするために必要なSFRの設定は『12ソフトウェア』を参照してください。

CS0 空間 (Block0 : 000-0000H ~01F-FFFFH、16Bit、ROM 空間)

ボード上に実装されたROM用の空間です。ROMとして使用できるのは最大512Kバイトですが、標準では64K×16ビット(128Kバイト)アクセス・タイム120nS以下のROMが実装されています。ウェイト制御はCPUのプログラマブル・ウェイト機能を使用します。必要ウェイト数は『12ソフトウェア』を参照してください。

なお、標準で実装されているROMには、Multiと接続してデバッグするためのモニタが組み込まれています。

CPUがシングルチップ・モードの場合は、この領域の一部にCPU内蔵のフラッシュROMが現れます。CPUのMODE0端子がLowの時は000-0000H~00F-FFFFHに、MODE0端子がHighの時は010-0000H~01F-FFFFHに内蔵フラッシュROM領域が現れます。これらの領域以外であればシングルチップ・モードであっても外部ROMをアクセスすることができます。



内蔵フラッシュROM領域は1Mバイト空間ありますが、実際のフラッシュROMは128Kバイトです。

CS1 空間 (Block1 : 020-0000H ~03F-FFFFH、16Bit、予約領域)

システムで予約した領域です。この領域にはアクセスしないでください。アクセスした場合の動作は保障されません。

CS2 空間 (Block2 : 040-0000H ~07F-FFFFH、16Bit、EDO-DRAM 空間)

ボード上に実装されたEDO-DRAM(Hyper-Page)の空間です。EDO-DRAMは、2M×8Bit×2個(4Mバイト)が搭載されています。データバスの幅は16ビットに設定します。

CS3 空間 (Block3 : 080-0000H ~0FF-FFFFH、16Bit、SIMM 空間)

ボード上に実装されたSIMM用ソケットの空間です。SIMMを搭載しない場合は、CPUコネクタを使用した拡張のための空間として使用することができます。

SIMMは4Mバイトと8Mバイトのもののみが使用可能です。また、Fast-PageとHyper-Pageのいずれのタイプも実装することができます。

CS4 空間 (Block4 : 300-0000H ~37F-FFFFH、DMA 使用時使用不可)

DMAを使用する場合、CPUのCS4-/RAS4-/IOWR-/P84端子をIOWR-として使用するため、この空間は使用できません。DMAを全く使用しない場合は、この空間をCPUコネクタを使用した拡張のための空間として使用することができます。この場合、IORD-およびIOWR-を使用しないようにディップ・スイッチの設定を行う必要があります(『3.1.1ディップ・スイッチ1(SW1)』を参照)。

CS5 空間 (Block5 : 380-0000H ~3BF-FFFFH、DMA 使用時使用不可)

DMAを使用する場合、CPUのCS5-/RAS5-/IORD-/P85端子をIORD-として使用するため、この空間は使用できません。DMAを全く使用しない場合は、CPUコネクタを使用した拡張のための空間として使用することができます。この場合、IORD-およびIOWR-を使用しないようにディップ・スイッチの設定を行う必要があります(『3.1.1ディップ・スイッチ1(SW1)』を参照)。

CS6 空間 (Block6 : 3C0-0000H ~ 3DF-FFFFH、16Bit、拡張 / I/O 空間)

この空間は以下の 3 つの空間に分かれています。Wait 制御は CPU の WAIT-端子を使用してハードウェアが行っています。

予約領域 (3C0-0000H ~ 3CF-FFFFH):

システムで予約した領域です。この領域にはアクセスしないでください。アクセスした場合の動作は保障されません。

EXT-BUS 領域 (3D0-0000H ~ 3D7-FFFFH):

EXT-BUS に割り当てられた空間です。EXT-BUS のメモリ空間に対しても I/O 空間に对しても、この領域を使用してアクセスします。EXT-BUS の 16M バイトのアドレス空間に対してこの領域は 512K バイトしかないため、上位のアドレスはバンク・ポートで指定します。また、EXT-BUS のメモリ、I/O のいずれの空間をアクセスするかもバンク・ポートで指定します (『6.10EXT-BUS CPU-Core 用バンク・ポート(3D8-00B0H[Read/Write])』、『6.11EXT-BUS DMA0 用バンク・ポート(3D8-00C0H[Read/Write])』、『6.12EXT-BUS DMA1 用バンク・ポート(3D8-00D0H[Read/Write])』を参照)。

System-I/O 領域 (3D8-0000H ~ 3DF-FFFFH):

ボード上に実装されているタイマー、シリアル / パラレル・ポートや、その他の制御ポートが割り付けられています (『6.1SYSTEM-IO 一覧』を参照)。

CS7 空間 (Block7 : 3E0-0000H ~ 3FF-FFFFH、16Bit、SRAM 空間)

ボード上に実装された SRAM 用の空間です。SRAM は $128K \times 8\text{Bit} \times 4$ 個 (512K バイト) アクセス・タイム 15nS のものが実装されています。ウェイト制御は CPU のプログラマブル・ウェイト機能を使用します。必要ウェイト数は『12ソフトウェア』を参照して下さい。

この領域には、CPU の内蔵 RAM と内蔵 I/O (SFR) の空間があるため、3FF-E000H ~ 3FF-FFFFH の空間からは SRAM がアクセスできません。

6. SYSTEM-IO

SYSTEM-IO は、メモリ空間にマップされた I/O デバイスで UART/PRINTER, TIC, ISA バス・インターフェースなどがあります。

6.1. SYSTEM-IO 一覧

SYSTEM-IO の一覧を以下の表に示します。

アドレス	機能	備考
3D8-0000H ~ 3D8-000EH	UART-CH#0(TL16PIR552)設定 / 参照	
3D8-0010H ~ 3D8-001EH	UART-CH#1(TL16PIR552)設定 / 参照	
3D8-0020H ~ 3D8-002EH	PRINTER(PPCS-)(TL16PIR552)設定 / 参照	
3D8-0030H ~ 3D8-003EH	PRINTER(ECPICS-)(TL16PIR552)設定 / 参照	
3D8-0040H ~ 3D8-0046H	タイマコントローラ(uPD71054)設定 / 参照	リカバリタイムが必用
3D8-0050H	7セグメント LED 表示データ設定	
3D8-0050H	DIPSW7 参照	
3D8-0060H	ステータス参照(SIMM-PD,etc)	
3D8-0070H ~ 3D8-007FH	システム予約	アクセス禁止
3D8-0080H	コントロール・ポート設定 / 参照(Mask, Tover,etc)	
3D8-0090H	NMI, 割り込みセレクト設定 / 参照	
3D8-00A0H	割り込みステータス参照	
3D8-00B0H	EXT-BUS CPU-Core 用バンクポート設定 / 参照	
3D8-00C0H	EXT-BUS DMA0 用バンクポート設定 / 参照	
3D8-00D0H	EXT-BUS DMA1 用バンクポート設定 / 参照	
3D8-00E0H ~ 3D8-00FFH	システム予約	アクセス禁止

6.2. UART/PRINTER (TL16PIR552) (3D8-0000H ~ 3D8-003EH)

UART/PRINTER として TEXAS INSTRUMENTS 製の TL16PIR552(DUAL UART WITH 1284 PARALLEL PORT)LSIを使用しています。TL16PIR552 は、UART を 2 チャンネル、IEEE1284 準拠の双方向プリンタ・ポートを 1 チャンネル備えており、UART の送受信部には 16 キャラクタ分の FIFO バッファを持ち、RTS/CTS フローを自動的に制御する機能を備えているため、最小限の割り込みでオーバーラン・エラーを押さえられます。

TL16PIR552 はの各レジスタは、表のように割り付けられています。各レジスタの機能については、TL16PIR552 のマニュアルを参照してください。

アドレス	機能	読み出し	書き込み
3D8-0000H	UART-CH#0	RBR/DLL	THR/DLL
3D8-0002H		IER/DLM	IER/DLM
3D8-0004H		IIR	FCR
3D8-0006H		LCR	LCR
3D8-0008H		MCR	MCR
3D8-000AH		LSR	LSR
3D8-000CH		MSR	MSR
3D8-000EH		SCR	SCR
3D8-0010H	UART-CH#1	RBR/DLL	THR/DLL
3D8-0012H		IER/DLM	IER/DLM
3D8-0014H		IIR	FCR
3D8-0016H		LCR	LCR
3D8-0018H		MCR	MCR
3D8-001AH		LSR	LSR
3D8-001CH		MSR	MSR
3D8-001EH		SCR	SCR
3D8-0020H	PRINTER(PPCS-)	DATA	DATA/ECPAIFO
3D8-0022H		DSR	----
3D8-0024H		DCR	DCR
3D8-0026H		EPPADDR	EPPADDR
3D8-0028H ~ 3D8-002EH		EPPDATA	EPPDATA
3D8-0030H	PRINTER(ECPCS-)	PPDATAFIFO/ TESTFIFO/CNFGA	PPDATAFIFO/ TESTFIFO
3D8-0032H		CNFGB	----
3D8-0034H		ECR	ECR

TL16C552A レジスタ配置

TL16PIR552 の XIN 入力には 22.1184MHz のクロックが接続されています。UART-CH#0、UART-CH#1、PRINTER の各割り込みは下表のように CPU の割り込みに接続することができます。

割り込み発生元	接続 CPU 割り込み	割り込みエッジ
UART-CH#0	NMI/P20, INTP130/P34, INTP131/SO2/P35	立ち上がりエッジ
UART-CH#1	INTP132/SI2/P36	立ち上がりエッジ
PRINTER	INTP133/SCK2-/P37	立ち上がりエッジ

マスカブル割り込みはディップ・スイッチの SW2 を経由しています。NMI については『9.3NMI』を、マスカブル割り込みについては『9.4INTP130/P34』および『9.12ポート(タイプ3)』を参照してください。

UART-CH#0 はボードのリアパネルにある JSIO1 コネクタに、UART-CH#1 は JSIO2 コネクタ、PRINTER は JPRT に接続しています。また、UART-CH#0 は Multi をシリアル通信で用いる場合に使用され、その時に NMI を使用します。

TL16PIR552 は、システム・リセットによってリセットされます。

6.3. TIC (uPD71054) (3F-F040H ~ 3F-F048H)

TIC は NEC 製の uPD71054 が実装されています。uPD71054 は Intel 製の i8254 と互換であり、3 つのタイマ / カウンタを持っています。これらのタイマ / カウンタにより、モニタのタイマ割り込みの生成を行っています。

TIC の各レジスタは、表の通りに割り当てられています。

アドレス	読み出し	書き込み
3D8-0040H	COUNTER#0	COUNTER#0
3D8-0042H	COUNTER#1	COUNTER#1
3D8-0044H	COUNTER#2	COUNTER#2
3D8-0046H	----	Control Word

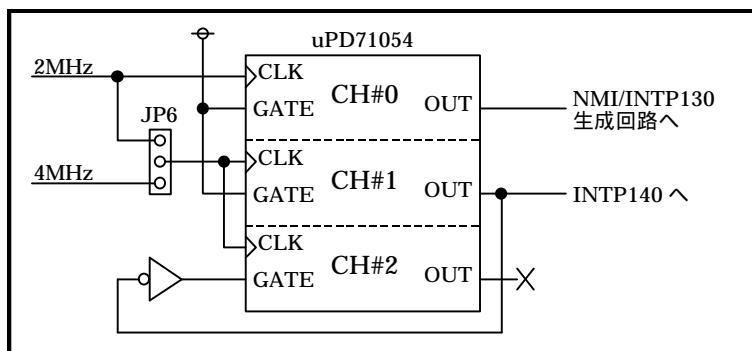
TIC のレジスタ配置

TIC の各チャネルは下図のよう接続されています。

チャネル 0 は、NMI および INTP130 生成回路に接続され、Multi 用 ROM モニタ・プログラムのインターバル・タイマとして使用されます。クロック入力には 2MHz が接続されています。

チャネル 1 は、ユーザのプログラムで自由に使用することができます。CPU の INTP140/P114 に接続されています。同時にチャネル 1 はチャネル 2 のプリスケール・カウンタとして機能します。

チャネル 2 は、ユーザのプログラムで自由に使用することができます。割り込みには接続されません。チャネル 1 およびチャネル 2 に接続されているクロックは、ボード上の JP6 により 2MHz か 4MHz のいずれかを選択して接続できます。



uPD71054 はコマンド・リカバリ・タイムとして 165ns 必要とします。リカバリ・タイムについては『12ソフトウェア』を参照してください。

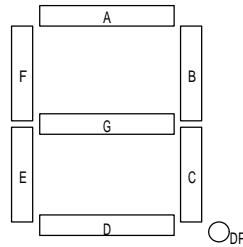
TIC は、システム・リセットによってリセットされます。

6.4. 7セグメントLED表示データ出力ポート(3D8-0050H [Write Only])

ボード上の7セグメントLEDに表示するデータを設定します。データ・フォーマットを下表に示します。該当するビットに0を設定すると対応するセグメントが点灯します。

電源投入時の初期値は不定です。

Bit7	Bit6	Bit5	Bit4	Bit3	Bit2	Bit1	Bit0
DPseg	Gseg	Fseg	Eseg	Dseg	Cseg	Bseg	Aseg



6.5. DIPSW7 読み出しポート(3D8-0050H [Read Only])

ボード上のDIPSW7の状態を読み出すためのポートです。データ・フォーマットを下表に示します。

Bit7	Bit6	Bit5	Bit4	Bit3	Bit2	Bit1	Bit0
SW7-8	SW7-7	SW7-6	SW7-5	SW7-4	SW7-3	SW7-2	SW7-1

SW7-[8..1] : ボード上に実装されているSW7の状態を読み出せます。SW7-1がSW7の"1"のスイッチに、SW7-8がSW7の"8"のスイッチに対応します。該当するビットのスイッチがONで0、OFFで1が読み出されます。

このスイッチはモニタの動作設定用のスイッチとして使用しています。設定方法は、ご使用のモニタに該当する付録の章を参照してください。

6.6. Status 読み出しポート(3D8-0060H [Read Only])

Bit7	Bit6	Bit5	Bit4	Bit3	Bit2	Bit1	Bit0
NMI/INTP-	SFLASH_BY-	SFLASH_WP-	SIMM_EDO-	PD4	PD3	PD2	PD1

PD[4..1] : ボードに実装されているDRAM(72ピンSIMM)のPD[4..1]が読み出せます。PD[2..1]の状態によって、実装されているDRAMのサイズを確認できます。PD[2..1]とDRAMの容量の関係を表に示します。

PD[2]	PD[1]	DRAMの容量
0	0	4Mバイト
0	1	予約
1	0	16Mバイト(使用不可)
1	1	8Mバイト

PD[2..1]とDRAMの容量

SIMM_EDO- : DIPSW4-4 の状態が読み出せます。このスイッチはボード上の SIMM ソケットに搭載されている SIMM が EDO であるかそうでないかをユーザが設定します。この機能はソフトウェア的に定義されているものであり、スイッチの切り替えがハードウェアに作用して機能を切り替えるものではありません。DIPSW4-4 が OFF で”1”、ON で”0”が読み出せます。このスイッチの状態によりソフトウェアは CPU 内部(SFR)の設定を変更することができます。

SFLASH_WP- : DIPSW4-1 の状態が読み出せます。このスイッチはシステムで予約されていますので、OFF で使用してください。将来の拡張に備え、このビットからどのような値が読み出されても、影響のないようにプログラムしてください。

SFLASH_BY- : システム予約です。将来の拡張に備え、このビットからどのような値が読み出されても、影響のないようにプログラムしてください。

NMI/INTP- : DIPSW4-5 の状態が読み出せます。このスイッチはシステムで予約されていますので、OFF で使用してください。将来の拡張に備え、このビットからどのような値が読み出されても、影響のないようにプログラムしてください。

6.7. コントロール・ポート(3D8-0080H [Read/Write])

割り込み関係の制御ビットがあります。電源投入時、およびリセット時の初期値は 0x03 です。

Bit7	Bit6	Bit5	Bit4	Bit3	Bit2	Bit1	Bit0
未使用	未使用	未使用	SFLASH_RP-	TM0_INT_CLR	TOV_INT_CLR	INTP130_MASK	NMI_MASK

NMI_MASK : NMI の最終的なマスクを制御するポートです。NMI 信号の生成ロジックについては『9.3NMI』を参照してください。

INTP130_MASK : INTP130 の最終的なマスクを制御するポートです。INTP130 信号の生成ロジックについては『9.4INTP130/P34』を参照してください。

TOV_INT_CLR : CPU のレディー・タイムアウトによる割り込みは、ハード的に保持され CPU に接続しています。このビットはこの保持された割り込みの状態をクリアするビットです。このビットを一旦”1”に設定し”0”に戻すと、割り込み発生の保持状態がクリアされます。通常は”0”に設定しておきます。

TM0_INT_CLR : TIC (μPD71054) のチャンネル 0 による割り込みの発生は、ハード的に保持され CPU に接続しています。このビットはこの保持された割り込みの状態をクリアするビットです。このビットを一旦”1”に設定し”0”に戻すと、割り込み発生の保持状態がクリアされます。通常は”0”に設定しておきます。

SFLASH_RP- : システムで予約しています。将来の拡張に備え、設定されている値を変化させないようにプログラムして下さい。具体的には、設定を変える場合は一端読み出した後、設定を変えるビットのみを操作して、書き込んでください。

未使用 : 未使用のビットは、将来の拡張に備え、設定されている値を変化させないようにプログラムしてください。具体的には、設定を変える場合は一端読み出した後、設定を変えるビットのみを操作して、書き込んでください。

6.8. NMI/INTP130 セレクト・ポート(3D8-0090H[Read/Write])

NMI および INTP130 の生成を制御するポートです。NMI および INTP130 信号の生成ロジックについては『9.3NMI』および『9.4INTP130/P34』を参照してください。

電源投入時、およびリセット時の初期値は 0x00 です。

Bit7	Bit6	Bit5	Bit4	Bit3	Bit2	Bit1	Bit0
TOV_INTEN	TM0_INTEN	ISACOM_INTEN	UART0_INTEN	TOV_NMIEN	TM0_NMIEN	ISACOM_NMIEN	UART0_NMIEN

各ビットは該当割り込み要求により NMI もしくは INTP130 を発生される時"1"に、発生させない時に"0"に設定します。

UART0_NMIEN,UART0_INTEN : TL16PIR552 の UART-CH#0 の割り込み要求

ISACOM_NMIEN,ISACOM_INTEN : ISA バスとの通信による割り込み要求

TM0_NMIEN,TM0_INTEN : TIC(uPD71054)の TOUT0 による割り込み要求

TOV_NMIEN,TOV_INTEN : タイムオーバ・レディーの発生による割り込み要求

6.9. NMI/INTP130 ステータス・ポート(3D8-00A0H [Read only])

NMI 要求および INTP130 要求の要求元を特定するためのポートです。NMI および INTP130 信号の生成ロジックについては『9.3NMI』および『9.4INTP130/P34』を参照してください。

Bit7	Bit6	Bit5	Bit4	Bit3	Bit2	Bit1	Bit0
---	---	---	---	TOV_INTRQ	TM0_INTRQ	ISACOM_INTRQ	UART0_INTRQ

各ビットは該当割り込み要求が発生している時"1"が、発生していない時"0"が読み出せます。各ビットは、各割り込み要求元の割り込み要求状態を示し、NMI/INTP130 セレクト・ポートの設定の影響を受けません。従って、NMI/INTP130 ステータス・ポートの内容と NMI/INTP130 セレクト・ポートの内容を AND したものが、NMI および INTP130 の発生の原因となっている割り込み要因です。

UART0_INTRQ : TL16PIR552 の UART-CH#0 の割り込み要求

ISACOM_INTRQ : ISA バスとの通信による割り込み要求

TM0_INTRQ : TIC(uPD71054)の TOUT0 による割り込み要求

TOV_INTRQ : タイムオーバ・レディーの発生による割り込み要求

6.10. EXT-BUS CPU-Core 用バンク・ポート(3D8-00B0H[Read/Write])

メモリマップの 3D0-0000H ~ 3D7-FFFFH で EXT-BUS をアクセスする時、EXT-BUS に出力されるアドレスの A[23:19]を設定するポートです。また、EXT-BUS のメモリ空間へのアクセスか、I/O 空間へのアクセスかも設定します。このポートに設定するバンク・アドレスは、CPU-Core がアクセスする時 (プログラムにより CPU がアクセスする時) に使用されるものです。

電源投入時、およびリセット時の初期値は 0x01 です。

Bit7	Bit6	Bit5	Bit4	Bit3	Bit2	Bit1	Bit0
CC_EXTA23	CC_EXTA22	CC_EXTA21	CC_EXTA20	CC_EXTA19	未使用	未使用	CC_MEMSEL

CC_EXTA[23:19] : EXT-BUS のアドレス A[23:19]に出力される値を設定します。EXT-BUS のアドレス A[18:2]は、CPU のアドレス線がそのまま出力されます。

CC_MEMSEL : 3D0-0000H ~ 3D7-FFFFH にアクセスした時に、EXT-BUS のメモリ空間にアクセスするのか I/O 空間にアクセスするのかを設定します。このビットを"1"に設定するとメモリ空間、"0"

に設定すると I/O 空間へアクセスします。

未使用：未使用のビットは、将来の拡張に備え、設定されている値を変化させないようにプログラムしてください。具体的には、設定を変える場合は一端読み出した後、設定を変えるビットのみを操作して、書き込んでください。

6.11. EXT-BUS DMA0 用バンク・ポート(3D8-00C0H[Read/Write])

メモリマップの 3D0-0000H ~ 3D7-FFFFH で EXT-BUS をアクセスする時、EXT-BUS に出力されるアドレスの A[23:19]を設定するポートです。また、EXT-BUS のメモリ空間へのアクセスか、I/O 空間へのアクセスかも設定します。このポートに設定するバンク・アドレスは、DMA のチャンネル 0 が 2 サイクル DMA でアクセスする時 (DMA サイクル) に使用されるものです。

電源投入時、およびリセット時の初期値は 0x01 です。

Bit7	Bit6	Bit5	Bit4	Bit3	Bit2	Bit1	Bit0
D0_EXTA23	D0_EXTA22	D0_EXTA21	D0_EXTA20	D0_EXTA19	未使用	D0_2CYCLE	D0_MEMSEL

D0_EXTA[23:19]：EXT-BUS のアドレス A[23:19]に出力される値を設定します。EXT-BUS のアドレス A[18:2]は、CPU のアドレス線がそのまま出力されます。

D0_2CYCLE：CPU の DMA のチャンネル 0 を 2 サイクル DMA で用いる場合に、このビットを”1”に設定します。フライバイ DMA で用いる場合は”0”に設定します。

D0_MEMSEL：3D0-0000H ~ 3D7-FFFFH にアクセスした時に、EXT-BUS のメモリ空間にアクセスするのか I/O 空間にアクセスするのかを設定します。このビットを”1”に設定するとメモリ空間、”0”に設定すると I/O 空間へアクセスします。

未使用：未使用のビットは、将来の拡張に備え、設定されている値を変化させないようにプログラムしてください。具体的には、設定を変える場合は一端読み出した後、設定を変えるビットのみを操作して、書き込んでください。

6.12. EXT-BUS DMA1 用バンク・ポート(3D8-00D0H[Read/Write])

メモリマップの 3D0-0000H ~ 3D7-FFFFH で EXT-BUS をアクセスする時、EXT-BUS に出力されるアドレスの A[23:19]を設定するポートです。また、EXT-BUS のメモリ空間へのアクセスか、I/O 空間へのアクセスかも設定します。このポートに設定するバンク・アドレスは、DMA のチャンネル 1 が 2 サイクル DMA でアクセスする時 (DMA サイクル) に使用されるものです。

電源投入時、およびリセット時の初期値は 0x01 です。

Bit7	Bit6	Bit5	Bit4	Bit3	Bit2	Bit1	Bit0
D1_EXTA23	D1_EXTA22	D1_EXTA21	D1_EXTA20	D1_EXTA19	未使用	D1_2CYCLE	D1_MEMSEL

D1_EXTA[23:19]：EXT-BUS のアドレス A[23:19]に出力される値を設定します。EXT-BUS のアドレス A[18:2]は、CPU のアドレス線がそのまま出力されます。

D1_2CYCLE：CPU の DMA のチャンネル 1 を 2 サイクル DMA で用いる場合に、このビットを”1”に設定します。フライバイ DMA で用いる場合は”0”に設定します。

D1_MEMSEL：3D0-0000H ~ 3D7-FFFFH にアクセスした時に、EXT-BUS のメモリ空間にアクセスするのか I/O 空間にアクセスするのかを設定します。このビットを”1”に設定するとメモリ空間、”0”に設定すると I/O 空間へアクセスします。

未使用：未使用のビットは、将来の拡張に備え、設定されている値を変化させないようにプログラムしてください。具体的には、設定を変える場合は一端読み出した後、設定を変えるビットのみを操

作して、書き込んでください。

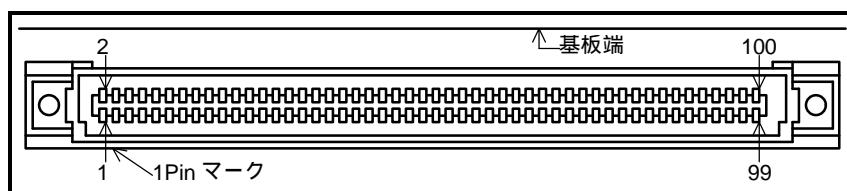
7. EXT-BUS バス仕様

JEXT コネクタは、メモリや I/O などを拡張できるように用意された EXT-BUS 用のコネクタです。このコネクタには、本ボードの内部のローカル・バスが接続されています。

7.1. ピン配置

番号	信号名	番号	信号名	番号	信号名	番号	信号名
1	GND	2	+5V	3	D0	4	D1
5	D2	6	D3	7	GND	8	D4
9	D5	10	D6	11	D7	12	GND
13	D8	14	D9	15	D10	16	D11
17	GND	18	D12	19	D13	20	D14
21	D15	22	GND	23	D16	24	D17
25	D18	26	D19	27	GND	28	D20
29	D21	30	D22	31	D23	32	GND
33	D24	34	D25	35	D26	36	D27
37	GND	38	D28	39	D29	40	D30
41	D31	42	GND	43	+5V	44	GND
45	Reserve	46	Reserve	47	(A1)	48	A2
49	A3	50	A4	51	GND	52	A5
53	A6	54	A7	55	A8	56	A9
57	A10	58	GND	59	A11	60	A12
61	A13	62	A14	63	A15	64	A16
65	GND	66	A17	67	A18	68	A19
69	A20	70	A21	71	A22	72	A23
73	GND	74	+5V	75	MRD-	76	Reserve
77	MWR0-	78	MWR1-	79	MWR2-	80	MWR3-
81	IORD-	82	IOWR-	83	GND	84	READY
85	GND	86	INT0-	87	INT1-	88	INT2-
89	INT3-	90	DMARQ0-	91	DMARQ1-	92	DMAAK0-
93	DMAAK1-	94	RESET-	95	32/16BIT-	96	N/C
97	+5V	98	GND	99	CLK	100	GND

JEXT コネクタピン配置



JEXT のピン配置

7.2. 信号

信号名	入出力	機能
D[0..31]	入出力	データ・バス信号。CPU のデータ・バス信号をバッファして接続。ボード上で 10K ブルアップ。
A[1..23]	出力	アドレス・バス信号。CPU のアドレス信号をバッファして接続。
MRD-	出力	メモリ・リード・サイクルのタイミング信号。EXT-BUS 空間のアクセス時のみ、アクティブになる。
MWR-[0..3]	出力	メモリ・ライト・サイクルのタイミング信号。それぞれ、MWR0-は D[0..7]に、MWR1-は D[8..15]に、MWR2-は D[16..23]に、MWR3-は D[24..31]に対応。EXT-BUS 空間のアクセス時のみ、アクティブになる。
IORD-	出力	I/O リード・サイクルのタイミング信号。EXT-BUS 空間のアクセス時、もしくはフライバイ DMA サイクルの時アクティブになる。
IOWR-	出力	I/O ライト・サイクルのタイミング信号。EXT-BUS 空間のアクセス時、もしくはフライバイ DMA サイクルの時アクティブになる。
READY	入力	サイクルの終了を CPU に通知する信号。EXT-BUS 空間のみで有効。確実に CPU に READY を認識させるためには、MRD-,MWR-[0..3],IORD-,IOWR-がインアクティブになるまで READY をアクティブに保つことが必要。ボード上で 10K ブルアップ。
INT-[0..3]	入力	Low アクティブの割り込み要求信号。バッファ後 SW3 を経由して、それぞれ CPU の INTP150,INTP151,INTP152,INTP153 端子に接続されている。ボード上で 10K ブルアップ。 (#0 ポート (タイプ 3) 参照
DMARQ-[0..1]	入力	Low アクティブの DMA 要求信号。バッファ後 SW1 を経由して、それぞれ CPU の DMARQ0-,DMARQ1-端子に接続されている。ボード上で 10K ブルアップ。 (#0 ポート (タイプ 2) 参照
DMAAK-[0..1]	出力	Low アクティブの DMA 応答信号。CPU の DMAAK0-,DMAAK1-が、SW1 を経由後バッファされて接続されている。 (#0 ポート (タイプ 3) 参照
RESET-	出力	Low アクティブのシステム・リセット信号。
32/16BIT-	入力	この信号を Low にすると、CPU が 16Bit データバスの場合、D[15..0]のみが使用される。また、CPU が 32Bit データバスの場合、アドレスにより D[15..0]もしくは D[31..16]のいずれかが使用される (16 ビットバスモード)。High にすると、データバスの D[31..0]が使用される (32 ビットバスモード)。この信号はダイナミックに変化させてはならない。ボード上で 10K ブルアップ。
CLK	出力	クロック信号。V850E/MS1 の CLKOUT 端子がバッファ後、接続されている。
Reserve		予約信号。EXT-BUS を使用するボードは、この端子に何も接続しないこと。

JEXT コネクタ信号

注意事項 :

- 32/16BIT-信号は、将来の RTE-PC シリーズの全てでサポートされるとは限りません。EXT-BUS に接続するボードを将来の RTE-PC シリーズでも使用する予定の場合は、32 ビットバスモード

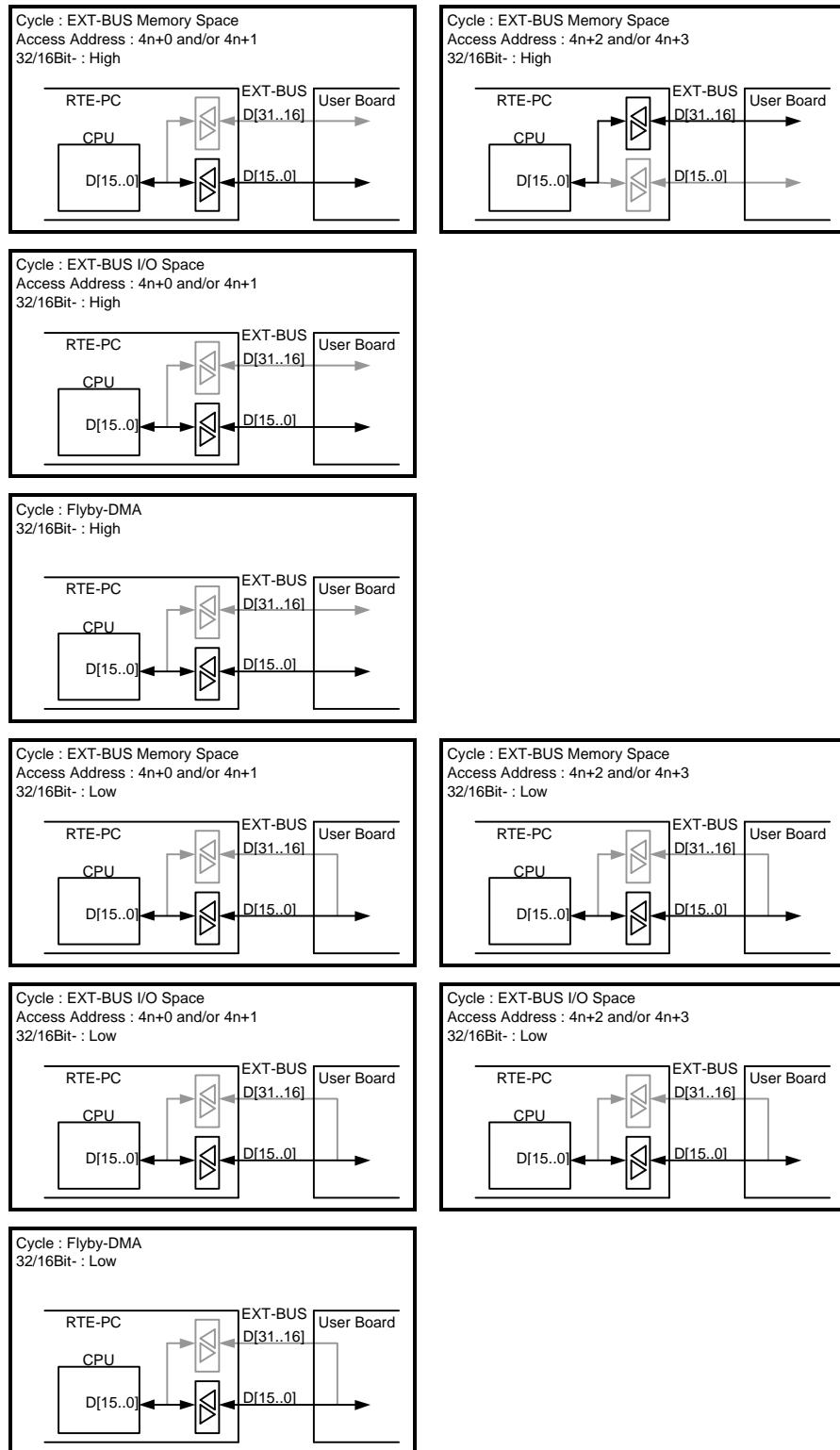
ドで動作するように設計してください。

- 2 . 32/16BIT-が Low の時は、MWR2-および MWR3-がアサートされることはありません。代わりに MWR0-および MWR1-がアサートされます。
また、32/16BIT-を Low にして使用する場合は、EXT-BUS に接続するボード上で D[15..0]と D[31..16]をショートしてください(『7.3データバスの接続』参照)。
- 3 . A1 は 32/16BIT-信号が Low の時有効です。したがって、32/16BIT-信号がサポートされていない将来の RTE-PC シリーズでは、A1 が出力されないことがあります。

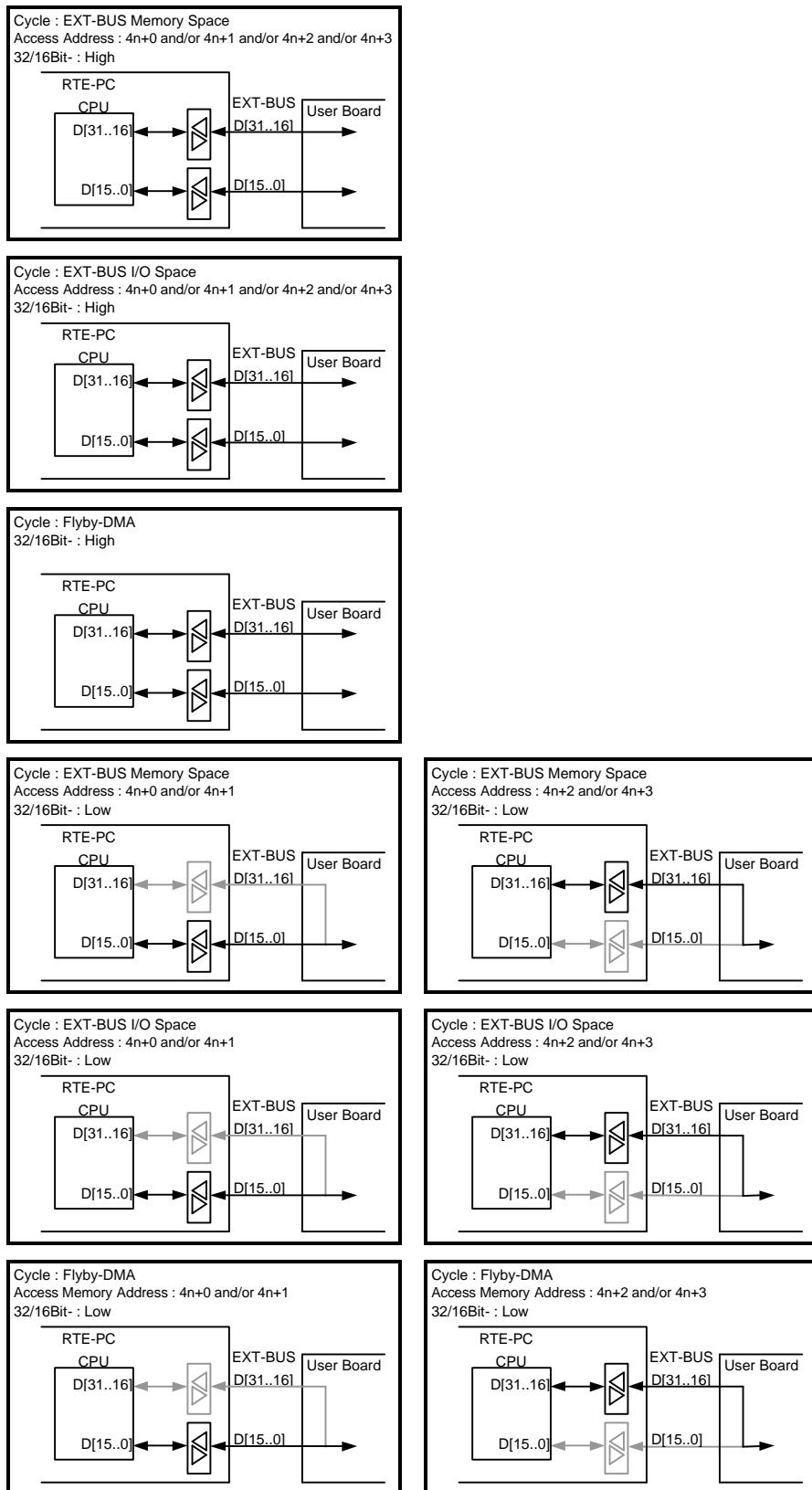
- 4 . EXT-BUS バスの 1 回のサイクルでの最大アクセス・バス幅は、CPU のデータ・バスのバス幅に依存します。例えば 16 ビット・データバスの CPU の場合、I/O へのアクセスやフライバイ DMA でのアクセスの場合、最大 16 ビットまでのアクセスしかできません。
したがって、EXT-BUS に接続するボードの I/O サイクルやフライバイ DMA サイクルでアクセスされるポートは、接続しようとする CPU のデータバス幅以下のデータバス幅でなければならず、そのアドレスは $4n+0$ 番地に配置されていなければなりません。
- 5 . DMA 機能は、将来の RTE-PC シリーズの全てでサポートされるとは限りません。

7.3. データバスの接続

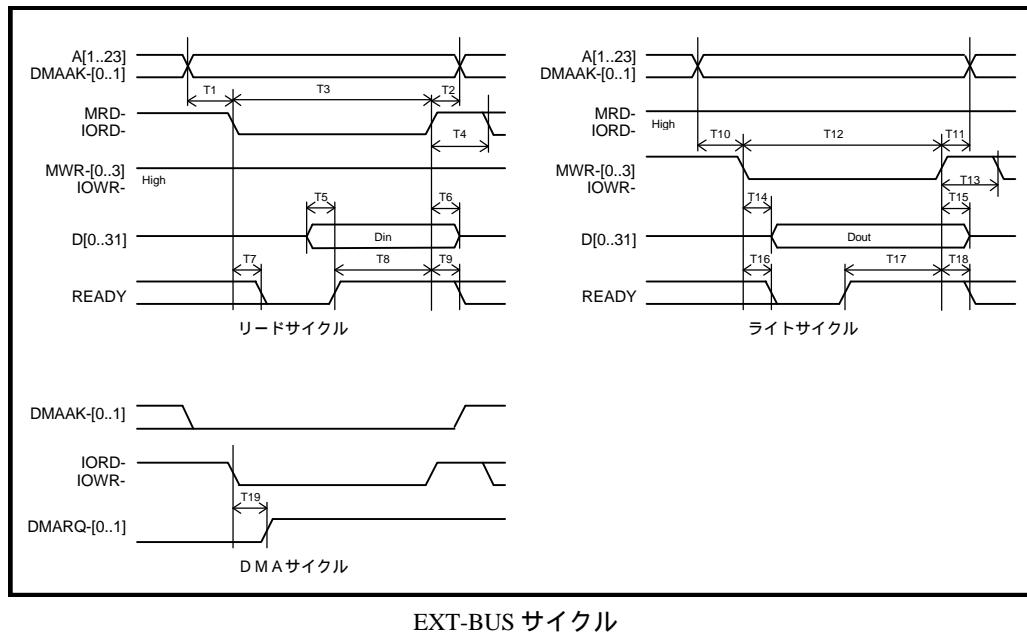
7.3.1. 16 ビット・データバスCPU (V850E/MS1)



7.3.2. 32 ビット・データバスCPU (参考)



7.4. タイミング



記号	内容	MIN(ns)	MAX(ns)
T1	ADDR,DMAAK- MRD-,IORD- セットアップ時間	10	
T2	MRD-,IORD- ADDR,DMAAK- ホールド時間	10	
T3	MRD-,IORD- サイクル時間	50	
T4	MRD-,IORD- サイクル間隔	20	
T5	RD DATA RD READY セットアップ時間	0	
T6	MRD-,IORD- RD DATA ホールド時間	0	
T7	MRD-,IORD- RD READY ディレイ時間		20
T8	RD READY MRD-,IORD- ディレイ時間	15	
T9	MRD-,IORD- RD READY ホールド時間	0	
T10	ADDR,DMAAK- MWR-,IOWR- セットアップ時間	10	
T11	MWR-,IOWR- ADDR,DMAAK- ホールド時間	10	
T12	MWR-,IOWR- サイクル時間	50	
T13	MWR-,IOWR- サイクル間隔	20	
T14	MWR-,IOWR- WR DATA ディレイ時間		20
T15	MWR-,IOWR- WR DATA ホールド時間	10	
T16	MWR-,IOWR- WR READY ディレイ時間		20
T17	WR READY MWR-,IOWR- ディレイ時間	0	
T18	MWR-,IOWR- WR READY ホールド時間	0	
T19	IORD-,IOWR- DMARQ- インアクティブ遅延時間		20

EXT-BUS AC スペック

7.5. 適合コネクタ

EXT-BUS に使用しているコネクタと、そのコネクタに勘合する適合コネクタの型番を以下に示します。

複数のボードを EXT-BUS に接続する場合は、ケーブルを使用してデージーチェーン接続を行います。

EXT-BUS 使用コネクタ	: KEL 社 8830E-100-170S
適合コネクタ (基板用)	: KEL 社 8802-100-170S
適合コネクタ (ケーブル用)	: KEL 社 8825E-100-1705
対ケーブル用ライトアングル (基板用)	: KEL 社 8830E-100-170L
	KEL 社 8831E-100-170L

7.6. 注意事項

EXT-BUS に接続するボードを設計する上での注意事項を以下に示します。

- 1 . 複数のボードを EXT-BUS に接続する場合は、READY 信号はボードが選択されているときのみドライブするように、Hi-Z 制御を行わなければなりません。
- 2 . EXT-BUS のサイクルにウェイトを挿入するためには、T7 および T16 を満足する必要があります。
- 3 . DMA サイクルをシングル転送モードで行う場合、次の DMA サイクルを確実に発生させないためには、タイミング図の T19 を満足する必要があります。ただし、この T19 は使用している DMA コントローラの仕様に大きく依存するため、将来の RTE-PC シリーズで変更される可能性があります。
- 4 . RTE-V850E/MS1-PC では、CPU に I/O 空間がないため、EXT-BUS の I/O 空間をアクセスするか、メモリ空間をアクセスするかは、ポートの設定に依存します (『6.10EXT-BUS CPU-Core 用バンク・ポート(3D8-00B0H[Read/Write])』『6.11EXT-BUS DMA0 用バンク・ポート(3D8-00C0H[Read/Write])』『6.12EXT-BUS DMA1 用バンク・ポート(3D8-00D0H[Read/Write])』参照)。
- 5 . RTE-V850E/MS1-PC でサポートされる DMA 転送は、幾つかの空間の組み合わせのみです (『8DMA』参照)。

8. DMA

RTE-V850E/MS1-PC では、CPU 内蔵の DMA コントローラを使用して、EXT-BUS に接続した外部のボードと、RTE-V850E/MS1-PC 上のメモリの間で DMA 転送を行うことができます。

本章ではこの DMA 転送について説明します。

8.1. DMA 転送可能な空間

EXT-BUS を使用して DMA 転送可能な空間は以下の組み合わせです。

フライバイ転送時

EXT-BUS I/O 空間 RTE-V850E/MS1-PC 上 SRAM

EXT-BUS I/O 空間 RTE-V850E/MS1-PC 上 DRAM

EXT-BUS I/O 空間 RTE-V850E/MS1-PC 上 SIMM

2 サイクル転送時

EXT-BUS 任意の空間 RTE-V850E/MS1-PC 上任意の空間

8.2. DMA チャンネル

EXT-BUS の DMA 信号と CPU の DMA チャンネルの関係を以下に示します。

EXT-BUS 信号	CPU DMA チャンネル
DMARQ0-,DMAAK0-	チャンネル 0
DMARQ1-,DMAAK1-	チャンネル 1

8.3. DIPSW の設定

EXT-BUS で DMA 転送を行う場合は、次の DIPSW を ON にする必要があります(『3.1.1 ディップ・スイッチ 1 (SW1)』参照)。

使用する DMA	DIPSW1 の設定					
	1	2	3	4	7	8
チャンネル 0	ON	ON			ON	ON
チャンネル 1			ON	ON	ON	ON

8.4. CPU の設定

DMA 転送を行うためには、使用するチャンネルの DMARQ-および DMAAK-端子が、DMA に使用するように設定されていることと、CS4-/RAS4-/IOWR-/P84 および CS5-/RAS5-/IORD-/P85 がそれぞれ IOWR-と IORD-として使用するように CPU の SFR が設定されていなければなりません。

8.5. バンクポート設定(2 サイクルDMA)

EXT-BUS で 2 サイクル DMA 転送を行う場合は、EXT-BUS の DMA バンクポートを設定する必要があります。DMA でアクセスする空間が EXT-BUS のメモリ空間か I/O 空間かも設定します(『6.11 EXT-BUS DMA0 用バンク・ポート(3D8-00C0H[Read/Write])』『6.12 EXT-BUS DMA1 用バンク・ポート(3D8-00D0H[Read/Write])』参照)。

EXT-BUS 用のバンクポートが、CPU-Core 用、DMA チャンネル 0 用、DMA チャンネル 1 用の 3 つが用意されているため、DMA 転送中であっても EXT-BUS の任意のアドレスにプログラムでアクセスすることができます。

また、1 度の DMA 転送で、EXT-BUS の複数のバンクにまたがった転送を行うことはできません。バンクにまたがった転送を行う場合は、バンク空間ごとに DMA 転送を行うようにしてください。

8.6. バンクポート設定(フライバイDMA)

フライバイ DMA 転送の場合、I/O 側のアドレスは不要なため、バンクポートのアドレスの設定は必要ありません。しかし、フライバイ DMA を行うことをバンクポートに設定する必要があります(『6.11EXT-BUS DMA0 用バンク・ポート(3D8-00C0H[Read/Write])』、『6.12EXT-BUS DMA1 用バンク・ポート(3D8-00D0H[Read/Write])』参照)。ただしバンクポートの設定は、どちらのチャンネルもフライバイ DMA を行う設定にリセット時にハード的にクリアされますので、リセット後バンクポートに何も書き込んでいなければ、バンクポートの設定を行わずにフライバイ DMA 転送を行うことができます。

8.7. モニタ使用時

モニタでは、タイマ割り込みや通信割り込みに、NMI を使用します。したがって、タイマ割り込みや通信で NMI が発生するため、その度に DMA が停止します。ROM モニタは DMA の再開を行いますが、停止している間 DMA が保留されます。

タイミング的にクリティカルな DMA を行う場合は、タイマ割り込みを停止するか、DMA 転送中は一時的に NMI をマスク(『6.7コントロール・ポート(3D8-0080H [Read/Write])』参照)して下さい。ただし、NMI がマスクされている間は如何なるブレークもできなくなります。

- Multi のプロファイル機能を使用するとタイマによるNMI 割り込みが入ります。したがって、プロファイル・タイマを停止することで、タイマ割り込みによるNMI は発生しなくなります。
- デバッガからの非同期のブレーク要求や、ブレーク・ポイントによるブレーク発生のデバッガへの通知には通信が使用されます。この通信はNMI によりハンドリングされているため、NMI を禁止にするとブレークができなくなります。

9. CPU 端子接続

本章では、RTE-V850E/MS1-PC 内での CPU の各端子の使用状態を説明します。

9.1. 一覧

下表は CPU 端子の使用状態の一覧です。詳細は後続の章で説明します。

端子名	使用状態	参照章
A0/PA0 ~ A7/PA7	アドレスバスとして使用	
A8/PB0 ~ A15/PB7		
A16/P60 ~ A22/P66		
A23/P67	ユーザ使用可能	9.10
ADV-/BCYST-/P94	システム予約	
ANI0/P70 ~ ANI7/P77	ユーザ使用可能	9.9
AVREF, AVSS, AVDD		
CKSEL	CKSEL 端子として使用	9.5
CS0-/RAS0-/P80	CS0 空間のチップセレクトとして使用	
CS1-/RAS1-/P81	システム予約	
CS2-/RAS2-/P82	EDO-DRAM の RAS-として使用	
CS3-/RAS3-/P83	SIMM の RAS-として使用	
CS4-/RAS4-/IOWR-/P84	DMA を使用する場合は IOWR-として使用 DMA を使用しない場合はユーザ使用可能	0
CS5-/RAS5-/IORD-/P85	DMA を使用する場合は IORD-として使用 DMA を使用しない場合はユーザ使用可能	0
CS6-/RAS6-/P86	CS6 空間のチップセレクトとして使用	
CS7-/RAS7-/P87	CS7 空間のチップセレクトとして使用	
D0/P40 ~ D7/P47	データバスとして使用	
D8/P50 ~ D15/P57		
HLDAK-/P96, HLDRQ-/P97	ユーザ使用可能	9.10
INTP100/DMARQ0-/P04	EXT-BUS の DMA を使用する場合は DMARQ-として使用、DMA を使用しない場合はユーザ使用可能	0
INTP101/DMARQ1-/P05		
INTP102/DMARQ2-/P06	システムで使用できるように回路が構成されているが、現在はシステムでは使用していないため、ユーザ使用可能	0
INTP103/DMARQ3-/P07	ユーザ使用可能	9.10
INTP110/DMAAK0-/P14	EXT-BUS の DMA を使用する場合は DMAAK-として使用、DMA を使用しない場合はユーザ使用可能	0
INTP111/DMAAK1-/P15		
INTP112/DMAAK2-/P16	システムで使用できるように回路が構成されているが、現在はシステムでは使用していないため、ユーザ使用可能	0
INTP113/DMAAK3-/P17	ユーザ使用可能	9.10
INTP130/P34	INTP として使用、割り込みを使用しない場合はユーザ使用可能	9.4
INTP131/SO2/P35	INTP として使用、割り込みを使用しない場合はユーザ使用可能	0
INTP132/SI2/P36, INTP133/SCK2-/P37		
INTP140/P114, INTP141/SO3/P115	INTP として使用、割り込みを使用しない場合はユーザ使用可能	0
INTP142/SI3/P116, INTP143/SCK3-/P117	ユーザ使用可能	9.10
INTP150/P124 ~ INTP152/P126	EXT-BUS の割り込みを使用する場合は INTP として使用、割り込みを使用しない場合はユーザ使用可能	0
INTP153/ADTRG/P127		
LCAS-/LWR-/P90	それぞれ LCAS-/LWR-, UCAS-/UWR-, RD-, WE-, OE-として使用	
UCAS-/UWR-/P91		
RD-/P92, WE-/P93, OE-/P95		
MODE0 ~ MODE2	MODE 端子として使用	9.5
MODE3/Vpp	MODE3/Vpp として使用	0
NMI/P20	NMI として使用、NMI を使用しない場合はユーザ使用可能	9.3
P21	CPU 内蔵フラッシュへのセルフ書き込み用 VPP 供給制御に使用	0
REFRQ-/PX5	ユーザ使用可能	9.10
RESET-	RESET-として使用	9.2

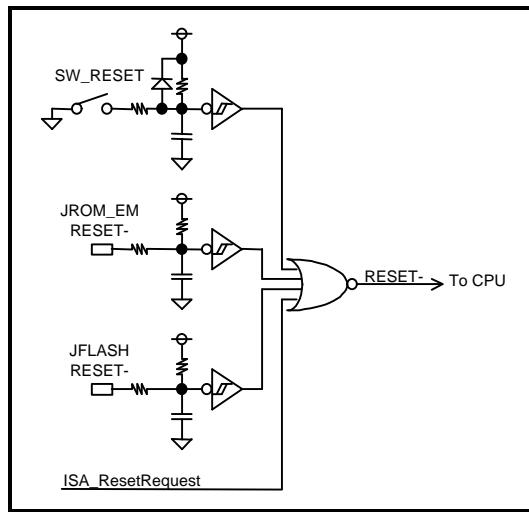
端子名	使用状態	参照
TO110/P00 , TO101/P01 TCLR10/P02 , TI10/P03	ユーザ使用可能	9.10
TO110/P10 , TO111/P11 TCLR11/P12 , TI11/P13	ユーザ使用可能	9.10
TO120/P100 , TO121/P101 TCLR12/P102 , TI12/P103 INTP120/TC0-/P104 ~ INTP123/TC3-/P107	ユーザ使用可能	9.10
TO130/P30 , TO131/P31 TCLR13/P32 , TI13/P33	ユーザ使用可能	9.10
TO140/P110 , TO141/P111 TCLR14/P112 , TI14/P113	ユーザ使用可能	9.10
TO150/P120 , TO151/P121 TCLR15/P122 , TI15/P123	ユーザ使用可能	9.10
TXD0/SO0/P22 , TXD0/SI0/P23 SCK0-/P24 , TXD1/SO1/P25 RXD1/SI1/P26 , SCK1-/P27	JFLASH,JRS232C 用に使用、JFLASH,JRS232C を使用しない場合は ユーザ使用可能	9.8
WAIT-/PX6 , CLKOUT/PX7	それぞれ WAIT- ,CLKOUT として使用	
X1 , X2	X1,X2 端子として使用	9.7
VDD	+3.3V	
VSS	GND	
HVDD	+5V	
HVSS	GND	
CVDD	+3.3V	
CVSS	GND	

9.2. RESET-

CPU へのリセットは以下に示した要因で発生します。このリセットは、CPU のリセットと共に、ボード制御回路のシステム・リセットとなります。

- **パワーオン・リセット**：ボードの電源 ON 時に発生するリセットです。
- **JROM_EM からのリセット要求**：JROM_EM コネクタの RESET-端子からの入力によるリセットです (『3.5.7 ROM エミュレータ用コネクタ (JROM_EM)』参照)。
- **SW_RESET によるリセット**：リアパネル部分に用意されているリセット・スイッチ(SW_RESET)が押されるとリセットが発生します (『3.3.1 リセット・スイッチ (SW_RESET)』参照)。
- **JFLASH からのリセット要求**：CPU の内蔵フラッシュ ROM の書き込みをライターを用いて行うために用意されている JFLASH コネクタからのリセット要求です (『3.5.11 フラッシュ書き込みコネクタ (JFLASH)』、『10 CPU 内蔵フラッシュ ROM 書き込み』参照)。
- **ホストからのリセット要求**：ISA バス経由でリセットを発生させることができます。

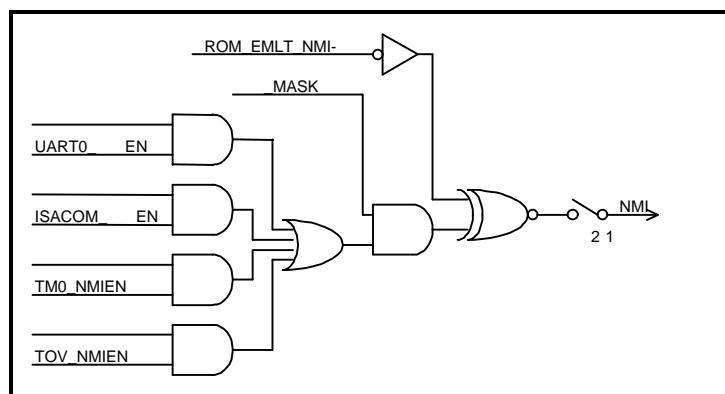
RESET の生成ロジックの概要を以下に示します。



9.3. NMI

NMI には、複数の割り込み要因がハード的に複合されたものが接続されています。複合されている割り込みは以下のものです。UART0_INT : TL16PR552 の UART0 の割り込みです (『6.2UART/PRINTER (TL16PIR552) (3D8-0000H ~ 3D8-003EH)』参照)。

- ISACOM_INT : ISA バス経由の通信制御のための割り込みです。この割り込みはシステム予約です。
- TM0_INT : TIC (μPD71054) の CH#0 の割り込みです (『6.3TIC (μPD71054) (3F-F040H ~ 3F-F048H)』『6.7コントロール・ポート (3D8-0080H [Read/Write])』参照)
- TOV_INT : タイムオーバ・レディーの発生による割り込みです (『11.1タイムオーバ・レディー』参照)
- ROM_EMLT_NMI- : JROM_EM コネクタから供給される、ROM エミュレータからの NMI 要求です (『3.5.7ROM エミュレータ用コネクタ (JROM_EM)』参照)



NMI が発生した場合は、以下の手順で処理します。

コントロール・ポートの NMI_MASK に”1”を設定して、NMI をハード的にマスクする（割り込みが複数発生している時のために、一旦マスクすることでエッジを生成する）。

NMI の要求元を検査する。NMI/INTP130 ステータス・ポートにより調べられる（『6.9 NMI/INTP130 ステータス・ポート(3D8-00A0H [Read only])』参照）。

要求元のための割り込み処理を行ない、要求をクリアする。

コントロール・ポートの NMI_MASK に”0”を設定して、マスクを解除する。

割り込み処理から復帰する。



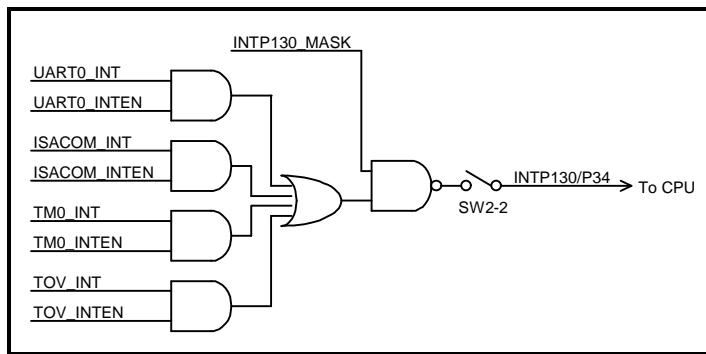
モニタを使用する場合は、SW2-1 を ON に設定し、NMI が使用できるようにななければなりません。
ROM エミュレータでデバッガを使用する場合も同様です。

9.4. INTP130/P34

INTP130/P34 には、複数の割り込み要因がハード的に複合されたものが接続されています。複合されている割り込みは以下のものです。割り込みの選択については『6.8

NMI/INTP130 セレクト・ポート(3D8-0090H[Read/Write]) 『6.9NMI/INTP130 ステータス・ポート(3D8-00A0H [Read only])』を参照してください。

- **UART0_INT** : TL16PR552 の UART0 の割り込みです (『6.2UART/PRINTER (TL16PIR552) (3D8-0000H ~ 3D8-003EH)』参照)
- **ISACOM_INT** : ISA バス経由の通信制御のための割り込みです。この割り込みはシステム予約です。
- **TM0_INT** : TIC (μPD71054) の CH#0 の割り込みです (『6.3TIC (uPD71054) (3F-F040H ~ 3F-F048H)』『6.7コントロール・ポート(3D8-0080H [Read/Write])』参照)
- **TOV_INT** : タイムオーバ・レディーの発生による割り込みです (『11.1タイムオーバ・レディー』参照)



INTP130/P34 が発生した場合は、以下の手順で処理します。

コントロール・ポートの INTP130_MASK に”1”を設定して、INTP130/P34 をハード的にマスクする（割り込みが複数発生している時のために、一旦マスクすることでエッジを生成する）。INTP130/P34 の要求元を検査する。NMI/INTP130 ステータス・ポートにより調べられる（『6.9NMI/INTP130 ステータス・ポート(3D8-00A0H [Read only])』参照）。

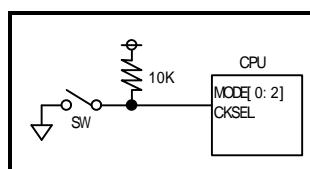
要求元のための割り込み処理を行ない、要求をクリアする。

コントロール・ポートの INTP130_MASK に”0”を設定して、マスクを解除する。

割り込み処理から復帰する。

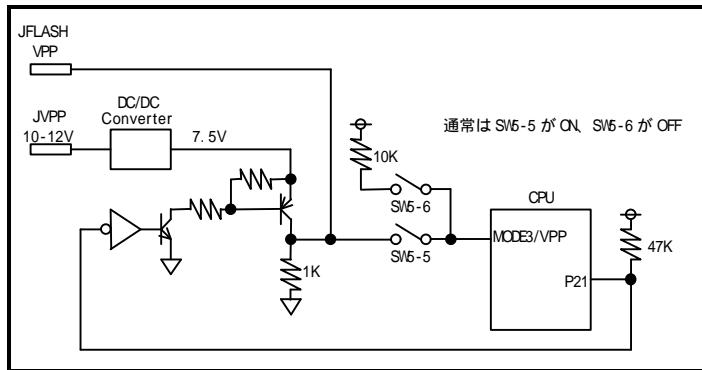
9.5. MODE0～MODE2,CKSEL

MODE0～MODE2 および CKSEL はディップスイッチ 5 の対応するスイッチによりレベルを変えられるようになっています (『3.1.5ディップ・スイッチ 5 (SW5)』参照)。



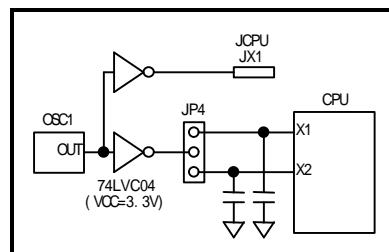
9.6. MODE3/Vpp,P21

MODE3/Vpp は、通常は Low レベルで使用しますが、CPU 内蔵フラッシュ ROM を書き換える場合は、Vpp として用います。Vpp の供給源は JFLASH コネクタ (『3.5.11フラッシュ書き込みコネクタ (JFLASH)』参照) と、JVPP コネクタ (『3.5.6セルフ書き込み電源供給用コネクタ (JVPP)』参照) の 2 つです。



9.7. X1,X2

X1,X2 端子は、JP4 にクリスタルを実装して用いることと、JP4 の中央のピンと X1 ピンをショートすることで、ソケットに実装した発振器を用いることができます。OSC1 は 5V (クリスタル・ソケット JP4) 『3.5.3 ソケット ()』参照)。

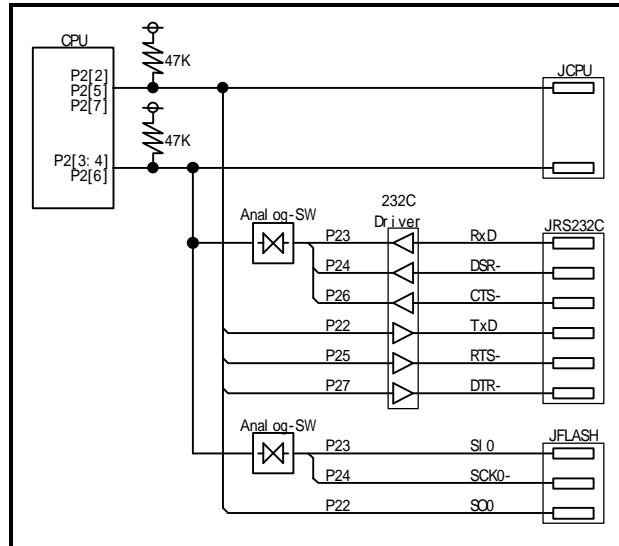


9.8. P22~P27

P22~P27 は、CPU 内蔵のシリアル I/F を使用して JRS232C コネクタにより、シリアル通信用に用いることができます (『3.5.10シリアル・コネクタ (JRS232C)』参照)。また、CPU 内蔵のフラッシュ ROM をライタで書き込む場合に使用されます (『10CPU 内蔵フラッシュ ROM 書き込み』参照)。

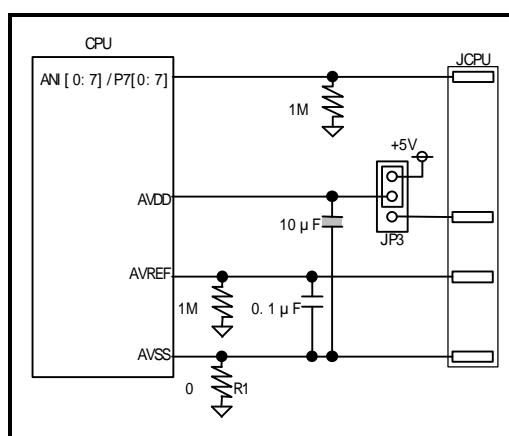
ディップスイッチの SW5-7 と SW5-8 の組み合わせで、どの用途で使用するかが決まります。

SW5-8	SW5-9	P22 ~ P27 用途
OFF	OFF	JCPU コネクタ経由でユーザが使用
OFF	ON	JRS232C コネクタ経由でシリアルとしてユーザが使用
ON	----	JFLASH コネクタ経由でフラッシュ ROM ライタと接続



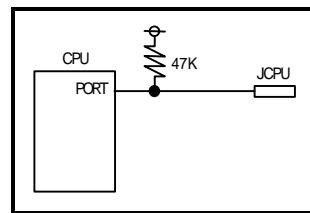
9.9. ANI0/P70 ~ ANI7/P77,AVDD,AVSS,AVREF

ANIO/P70～ANI7/P77,AVDD,AVSS,AVREF は、JCPU コネクタ経由でユーザが使用できます。



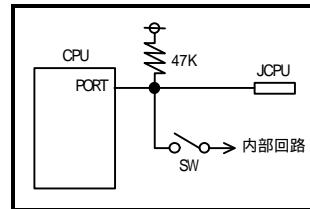
9.10. ポート(タイプ1)

このタイプのポートは、ユーザが自由に JCPU コネクタ経由で使用することができます。



9.11. ポート(タイプ2)

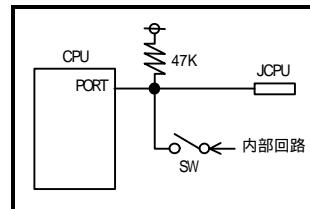
このタイプのポートは、ボード内部で機能が割り当ててありますが、割り当てられている機能を使用しない場合は、ユーザが自由に JCPU コネクタ経由で使用することが可能です。



端子名	スイッチ番号	内部機能	参照章
CS4/RAS4-/IOWR-/P84	SW1-8	IOWR-	3.1.1
CS5/RAS5-/IORD-/P85	SW1-7	IORD-	3.1.1
INTP110/DMAAK0-/P14	SW1-2	EXT-BUS の DMAAK0-	3.1.1
INTP111/DMAAK1-/P15	SW1-4	EXT-BUS の DMAAK1-	3.1.1
INTP112/DMAAK2-/P16	SW1-6	システム予約	3.1.1

9.12. ポート(タイプ3)

このタイプのポートは、ボード内部で機能が割り当ててありますが、割り当てられている機能を使用しない場合は、ユーザが自由に JCPU コネクタ経由で使用することが可能です。



端子名	スイッチ番号	内部機能	参照章
INTP100/DMARQ0-/P04	SW1-1	EXT-BUS の DMARQ0-	3.1.1
INTP101/DMARQ1-/P05	SW1-3	EXT-BUS の DMAAK0-	3.1.1
INTP102/DMARQ2-/P06	SW1-5	システム予約	3.1.1
INTP131/SO2/P34	SW2-3	UART0 の割り込み	3.1.2
INTP132/SI2/P36	SW2-4	UART1 の割り込み	3.1.2
INTP133/SCK2-/P37	SW2-5	PRINTER の割り込み	3.1.2
INTP140/P114	SW2-6	TIC の CH#1 の割り込み	3.1.2
INTP141/SO3/P115	SW2-7	システム予約	3.1.2
INTP150/P124	SW3-1	EXT-BUS の INT0-	3.1.3
INTP151/P125	SW3-2	EXT-BUS の INT1-	3.1.3

INTP152/P126	SW3-3	EXT-BUS ⓠ INT2-	3.1.3
INTP153/P127	SW3-4	EXT-BUS ⓠ INT3-	3.1.3

10. CPU 内蔵フラッシュ ROM 書き込み

CPU に内蔵されているフラッシュ ROM へ、専用のライタを使用して JFLASH コネクタ経由で書き込むことができます。この章では、CPU 内蔵フラッシュ ROM への書き込み方法を説明します (『3.5.11 フラッシュ書き込みコネクタ (JFLASH)』参照)。

10.1. スイッチの設定

CPU の内蔵フラッシュ ROM に書き込むためには、ボード上のスイッチが以下のように設定されている必要があります。

スイッチ	設定	備考
SW5-1	OFF	CPU の MODE0 ~ MODE3 端子をフラッシュ・メモリ・プログラミング・モードに設定
SW5-2	OFF	
SW5-3	ON	
SW5-4	ON/OFF	CKSEL をクロックの供給状態に合わせて設定 (OFF:ダイレクト・モード、ON:PLL モード)
SW5-5	ON	MODE3/VPP と JFLASH コネクタを接続するように設定
SW5-6	OFF	
SW5-8	ON	JFLASH コネクタが有効になるように設定

10.2. 通信方式

ライタと CPU の間の通信手段としては、下表の 2 つの方式が選択でき、どちらのモードを使用するかは、ライタ側で選択します。

通信方式
CMOS レベル非同期シリアル(UART)
CMOS レベル同期シリアル(CSI)

10.3. 書き込み手順

フラッシュ ROM の書き込みの手順を以下に示します。

1. RTE-V850E/MS1-PC の電源を切ります。
2. ディップスイッチ SW5 を設定します。
3. ライタを JFLASH コネクタに接続します。
4. ライタの電源が入っていることを確認して、RTE-V850E/MS1-PC の電源を投入します。
この時、ソケットボード上の JFLASH-LED (緑色の LED) が点灯します。ライタにターゲットの電源が投入されたことを示す LED がある場合は、その LED が点灯していることを確認してください。
5. ライタを操作し、書き込みを行います。
6. 書き込み終了後、RTE-V850E/MS1-PC の電源を切ります。
7. JFLASH コネクタからライタを外し、ディップスイッチ SW5 を適切な状態に設定します (CPU の内蔵フラッシュのプログラムを動作させるには、CPU をシングルチップ・モードに設定しなければなりません)。
8. RTE-V850E/MS1-PC の電源を投入します。

10.4. 注意事項

- フラッシュ ROM の書き込み / 消去などの際には、Vpp に高い電圧(7.5V)がかかります。十分注意して作業してください。

11. バス・サイクル

11.1. タイムオーバ・レディー

本ボードは、CPU が CS6 空間にに対して外部バス・サイクル（フライバイ DMA サイクルを含む）を発生させ、そのサイクルがある一定時間以内に終了しなかった場合は、タイムオーバ・レディーを発生させ、強制的にサイクルを終了させます。タイムオーバ・レディーが発生するまでの時間は、バス・サイクルが約 10m 秒以上継続した場合です（± 10% 程度の誤差あり）。

タイムオーバ・レディーが発生すると、ボード上の TOVER-LED が点灯し、NMI および INTP130 の割り込み要因が発生します。コントロール・ポートの TOV_INT_CLR-へ書き込むと、TOVER-LED が消灯し、NMI および INTP130 の割り込み要因がクリアされます。『5.2メモリ・マップ詳細』、『6.7 コントロール・ポート(3D8-0080H [Read/Write])』、『6.8

NMI/INTP130 セレクト・ポート(3D8-0090H[Read/Write])、『6.9NMI/INTP130 ステータス・ポート(3D8-00A0H [Read only])』、『9.3NMI』『9.4INTP130/P34』を参照してください。

11.2. SIMM インターフェース

11.2.1. 概要

SIMM 用の制御信号は、CPU の信号が直接接続されているのではなく、CPU の信号をボード内で加工したものが接続されています。以下の章では、どのように信号が加工されているか、概要を説明します。

11.2.2. 信号の説明

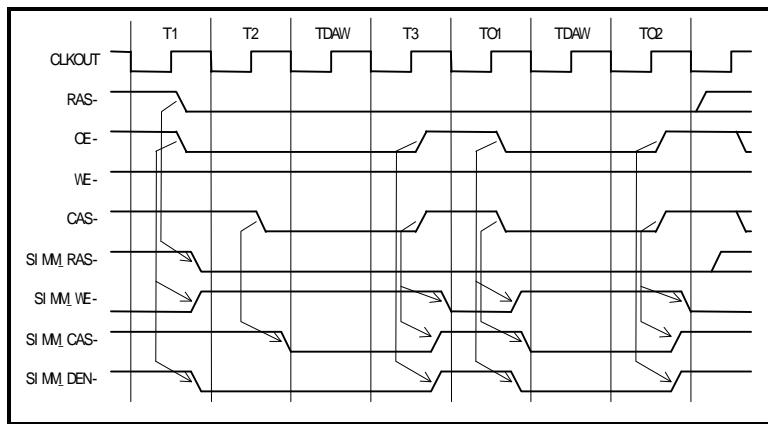
本章で説明する波形に用いられる信号名を次に説明します。

CLKOUT	: CPU が output するシステム・クロック。
RAS-	: CPU が output する RAS-信号。
OE-	: CPU が output する OE-信号。
WE-	: CPU が output する WE-信号。
CAS-	: CPU が output する CAS-信号。
SIMM_RAS-	: SIMM に入力される RAS-信号。
SIMM_WE-	: SIMM に入力される WE-信号。
SIMM_CAS-	: SIMM に入力される CAS-信号。
SIMM_DEN-	: CPU と SIMM 間のデータバスを開閉する信号。Low の時、CPU と SIMM のデータバスが接続される。

11.2.3. リード・サイクル

リード・サイクルの様子を図に示します。

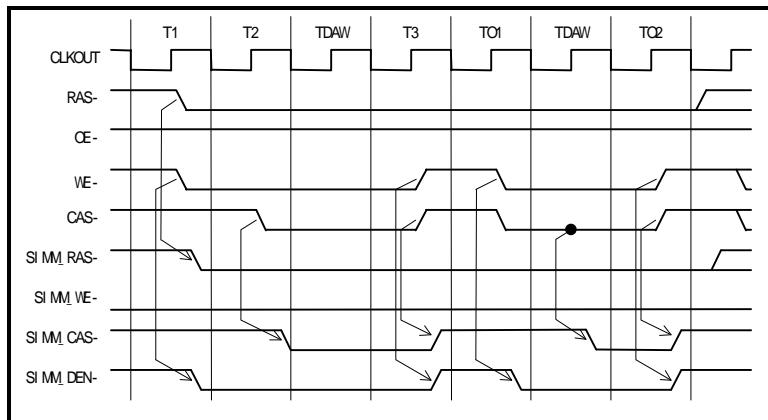
- SIMM の WE-信号は、リフレッシュ・サイクルとリード・サイクル以外はアクティブに保持されています。
- SIMM の RAS-信号は、SIMM の異なるバンクにアクセスがあった場合切り替わります。
- ライト・サイクルの時に必要になるため、最低 1 つ以上の TDAW サイクルが必要になります。
- SIMM が Fast-Page モードであっても、EDO モードであっても、CPU の信号の波形が変わらなければ、CPU の信号と SIMM への信号の関係は変わりません。



11.2.4. ライト・サイクル

ライト・サイクルの様子を図に示します。

- SIMM の WE-信号は、リフレッシュ・サイクルとリード・サイクル以外はアクティブに保持されています。
- SIMM の RAS-信号は、SIMM の異なるバンクにアクセスがあった場合切り替わります。
- CPU の WE-信号の立ち下がりと、CPU の CAS-信号の立ち下がりが同時の場合、SIMM への CAS-信号は 1 クロック遅れたものを使用します。このため、最低 1 つ以上の TDAW サイクルが必要になります。
- SIMM が Fast-Page モードであっても、EDO モードであっても、CPU の信号の波形が変わるものだけで、CPU の信号と SIMM への信号の関係は変わりません。



12. ソフトウェア

ここでは、メモリ資源のアクセスに関するパラメータ及びプログラム方法について説明します。

12.1. CPU 設定

CPU 内蔵のバス制御機能の設定値に対して制限事項はありません。したがって、バス・パフォーマンスを最大にするには、SFR の BCC(0xffff-f062)を 0x0000 に設定します。

12.2. CS 空間設定

12.2.1. CS0/CS7 空間 (SRAM/ROM)

SRAM と ROM に対しては、CPU のプログラマブル・ウェイト機能(SFR の DWC1 および DWC2)を使用してウェイトを生成します。下表に SRAM と、アクセスタイム 120ns/150nS の ROM を用了た場合のウェイト数の推奨値を示します。

動作周波数	SRAM-Wait 数	ROM(120ns) Wait 数	ROM(150nS) Wait 数
40MHz	1Wait	5Wait	6Wait
33MHz	1Wait	4Wait	5Wait
25MHz	0Wait	3Wait	4Wait

12.2.2. CS2 空間 (EDO-DRAM)

下表に CS2 空間の EDO-DRAM に関する設定推奨値を SFR の DRC レジスタと RWC レジスタに設定する値で示します。EDO-DRAM のリフレッシュ・サイクルは、1024 サイクル / 128m 秒です。

動作周波数	DCR.PAE	DCR.RPC	DCR.RHC	DCR.DAC	DCR.CPC	DCR.RHD	DCR.DAW
40MHz	10(EDO)	2	0	1	0	0	10(10Bit)
33MHz	10(EDO)	1	0	0	0	0	10(10Bit)
25MHz	10(EDO)	1	0	0	0	0	10(10Bit)

動作周波数	RWC.RRW	RWC.RCW	RWC.SRW
40MHz	1	0	2
33MHz	0	0	2
25MHz	0	0	2

12.2.3. CS3 空間 (SIMM)

下表に CS3 空間の SIMM に関する設定推奨値を SFR の DRC レジスタと RWC レジスタに設定する値で示します。PAE は SIMM のタイプによって設定してください。

動作周波数	SIMM	DRCRPC	DRC.RHC	DRC.DAC	DRC.CPC	DRC.RHD	DRC.DAW
33MHz	60nS	2	1	2	0	0	10(10Bit)
	70nS	2	1	2	0	0	10(10Bit)
33MHz	60nS	1	1	1	0	0	10(10Bit)
	70nS	2	1	1	0	0	10(10Bit)
25MHz	60nS	1	0	1	0	0	10(10Bit)
	70nS	1	0	1	0	0	10(10Bit)

動作周波数	SIMM	RWC.RRW	RWC.RCW
33MHz	60nS	1	0
	70nS	1	1
33MHz	60nS	0	0
	70nS	1	0
25MHz	60nS	0	0
	70nS	0	0

12.2.4. CS6 空間ウェイト

CS6 空間は、ボード上の回路が WAIT-信号を生成しますので、CPU のプログラマブル・ウェイトは 0 ウェイトに設定してください。

12.2.5. CS6 空間コマンド・リカバリ・タイム

uPD71054 のアクセスでは、コマンド・リカバリ・タイムの制限を満たす必要があります。したがって、uPD71054 へ連続的にアクセスする場合は、1 回目のアクセスの後一定時間以上経ってから 2 回目のアクセスを行う必要があります。

リカバリ・タイムは、uPD71054 以外のメモリ資源をリード・アクセスすることで発生させます。リカバリ・タイムを生成するためにリード・アクセスする推奨メモリ資源は、DIPSW7 読み出しポート(3D8-0050H)です。uPD71054 にアクセスした後は、必ず DIPSW7 読み出しポートからの読み出

しを1回行ってください。

注意事項として、uPD71054へのアクセスの後リカバリ・タイムを満足しないうちに、CS6空間へのいかなるライト・サイクルも発生させてはなりません。したがって、リカバリ・タイム発生処理をサブルーチンにする場合は、スタックがCS6空間にないことを確認してください。

12.3. ライブラリ

Cコンパイラでプログラムする時に必要となるI/Oアクセスなどのライブラリです。ただし、これらの記述やパラメータ受け渡し方法などは、MULTI環境でのものです。他のコンパイラ等を使用する場合には、変更が必要となる場合があります。

```
/* I/O 入出力ライブラリ */

/* GHS V800 コンパイラ パラメータ受け渡し */
/* arg0 : r6, arg1 : r7, arg2 : r8, return : r10 */

inb(int addr)           /* バイト(8ビット)入力 */
{
    __asm__("  ld.b 0[r6], r10");
}

inh(int addr)           /* ハーフワード(16ビット)入力 */
{
    __asm__("  ld.h 0[r6], r10");
}

inw(int addr)           /* ワード(32ビット)入力 */
{
    __asm__("  ld.w 0[r6], r10");
}

outb(int addr, int data) /* バイト(8ビット)出力 */
{
    __asm__("  st.b r7, 0[r6]");
}

outh(int addr, int data) /* バイト(8ビット)出力 */
{
    __asm__("  st.h r7, 0[r6]");
}

outw(int addr, int data) /* バイト(8ビット)出力 */
{
    __asm__("  st.w r7, 0[r6]");
}
```

12.4. タイマの使用法

ボード上の外部タイマ(uPD71054)でカスケード接続されたタイマ1とタイマ2を使用した時間計測のサンプルを示します。タイマ1はインターバルカウンタ(モード2)、タイマ2は、ダウンカウンタ(モード0)として初期化して、時間計測するルーチンの前後でカウンタ値を求めておくことで実行時間が算出できます。ただし、タイマのカウント値はどちらもダウンカウンタとなることに注意してください。また、外部タイマの連続アクセスではコマンドリカバリ(ROM領域のダミーリード)が必要となります。

```
/* タイマによる実行時間計測サンプル */

#define TIMERCLK      2000000      /* 2MHz */
```

```

#define INTERVAL      (TIMERCLK * 10 / 1000) /* 10ms (1/100) */
#define IOWAIT()      (*char *) 0x3D80050 /* I/O コマンドリカバリ用 */

InitTimer() /* タイマ初期化 */
{
    outb(0x3D80046, 0x74);      IOWAIT(); /* タイマ 1 モード 2 */
    outb(0x3D80042, INTERVAL);  IOWAIT(); /* タイマ 1 下位カウント */
    outb(0x3D80042, INTERVAL / 256); IOWAIT(); /* タイマ 1 上位カウント */
    outb(0x3D80046, 0xB0);      IOWAIT(); /* タイマ 2 モード 0 */
    outb(0x3D80044, 0xFF);      IOWAIT(); /* タイマ 2 下位カウント */
    outb(0x3D80044, 0xFF);      IOWAIT(); /* タイマ 2 上位カウント */
    return 0;
}

LatchTimer() /* カウントラッチ */
{
    int count1, count2, counts;

    outb(0x3D80046, 0xDC);      IOWAIT(); /* タイマ 1/2 マルチブルラッチ */
    count1 = inb(0x3D80042);    IOWAIT(); /* タイマ 1 カウント */
    count1 += inb(0x3D80042) * 256; IOWAIT(); /* タイマ 2 カウント */
    count2 = inb(0x3D80044);    IOWAIT(); /* タイマ 2 カウント */
    count2 += inb(0x3D80044) * 256; IOWAIT(); /* タイマ 2 カウント */
    counts = INTERVAL * (0xFFFF - count2)
        + (INTERVAL - count1);
    return counts;
}

double total_time;

main()
{
    int start_count, stop_count;

    InitTimer();
    start_count = LatchTimer(); /* スタートカウント値 */
    func();
    stop_count = LatchTimer(); /* ストップカウント値 */
    total_time = (double)(stop_count - start_count)
        / (double)TIMERCLK; /* 秒数 */
    return 0;
}

#include <time.h>

func() /* 時間計測ルーチン */
{
    ...
}

```


13. マスカブル割り込みを使用したアプリケーションの開発

本章では、RTE-V850E/MS1-PC 上でマスカブル割り込みを使用したアプリケーションの開発を行う場合の方法と制限事項について説明します。

13.1. 割り込みベクタ

V850E/MS1 の割り込みベクタ領域である 0000H ~ 07FFH 番地は、ROM により固定されていて書き換えることができません。そこでモニタでは、SRAM 上に代替えのベクタ領域を用意し、0000H ~ 07FFH 番地のベクタには、その代替えベクタ領域への分岐命令が置かれています。

例えば、例外コードが 0080H の割り込みが発生すると、CPU の割り込み機能により 0080H 番地に分岐します。そこには代替えベクタ領域のオフセット 0080H 番地への分岐命令があります。ユーザ・プログラムでは、この代替えベクタ領域を本来のベクタ領域と同じように書き換えることにより、割り込み発生時にユーザ・プログラムの割り込み処理ルーチンに分岐するようにできます。

通常の V850E/MS1 のプログラムと異なるのは、通常ベクタ領域は ROM 化の時点で固定されており、プログラムで設定する（書き換える）必要はありません。しかし、RTE-V850E/MS1-PC 上でモニタを使用したプログラムの場合、プログラムでベクタを書き換えてから、割り込みを許可する必要があります。

代替えベクタ領域は、SRAM 上の 3F7-8000H ~ 3F7-87FFH にあります（実際には SRAM のイメージが出ますので、他のアドレスからでも参照 / 変更可能です）。したがって、前述の例外コード 0080H の割り込みの場合、目的の割り込み処理に分岐する命令を 3F7-8080H 番地に書き込みます。

代替えベクタを書き換えるためのプログラム例を以下に示します（割り込み処理ルーチンから代替えベクタ領域への相対アドレスが 22Bit 以内の場合）。

```
void SetAJump(int addr, int jmpdest) /* ベクタ設定ルーチン */
{
    /* int addr;                                address where we're restoring the 'jr'
     */
    /* int jmpdest;      address where the 'jr' jumps to */
    {
        int offset;
        unsigned inst;
        unsigned int *p;

        offset = jmpdest - addr;
        inst = 0x07800000 /* 'jr' opcode */ | (offset & 0x003fffff);
        *((UINT16 *)addr) = (inst >> 16) & 0xffff;
        *((UINT16 *)(addr + 2)) = (inst) & 0xffff;
    }
    .....
}

void __interrupt IntEntry() /* 割り込み処理ルーチン */
{
    .....
}

main()
{
    .....
    SetAJump((int)(0x080 + 0x3e78000), (int)IntEntry);
    /* マスカブル割り込みを許可 */
}
```

13.2. 一般的な制限事項 / 注意事項

マスカブル割り込みを使用したアプリケーションをデバッグする上の制限事項と注意事項を以下に示します。

- 1) 代替えベクタの設定前に割り込みが発生した場合や、代替えベクタを正しく設定しないで割り込みが発生した場合には、割り込みの発生時点でのプログラム位置でブレークします。これは、代替えベクタの初期値がモニタのブレーク処理ルーチンへの分岐命令になっているためです。
- 2) 代替えベクタ領域から割り込み処理ルーチンまでの相対アドレスが 22Bit を超える場合、割り込み処理ルーチンへの分岐のために、少なくとも 1 つ以上のレジスタの値を壊すか、分岐の中継点を作る必要があります。
- 3) 代替えベクタ領域は、モニタの管理領域として保護されているため、プログラムのダウンロードで書き換えることはできません。
- 4) 割り込み関係を含む全てのペリフェラルは、ボード上のリセット・スイッチによってのみ初期化されます。 したがって、一端プログラムを実行した後に、プログラムを再ロードして動作させる場合、前のプログラム実行による影響がペリフェラル上に残ってしまいます。ペリフェラルを使用するプログラムの場合、一端プログラムを動作させ、再度プログラムを始めから動作させる場合は、以下の手順にしたがってください。
 - (1) モニタをディスコネクトします。
 - (2) RTE-V850E/MS1-PC のリセット・スイッチをボードをリセットします。
 - (3) モニタにコネクトします。
 - (4) プログラムをロードして実行します。
- 5) プログラムの先頭で一端 DI(割り込み禁止) 状態にしてから、ペリフェラルやベクタの設定をした後、EI(割り込み許可) 状態にするようにしてください。

13.3. ブレーク・ポイント使用に関する制限事項 / 注意事項

ブレーク・ポイントを割り込み処理ルーチン内に設定しブレークさせることもできますし、その後割り込み処理ルーチン内をシングル・ステップすることも可能です。その場合、以下に示す制限事項 / 注意事項がありますのでご注意ください。

- 1) ブレーク中は全てのマスカブル割り込みは受け付けません。
- 2) シングル・ステップ機能は、次の命令にテンポラリ・ブレーク・ポイントを設定する方式を取っています。この結果、EI(割り込み許可) 状態のユーザ・プログラムをシングル・ステップする場合、シングル・ステップ中にも割り込みを受け付け、1 命令をシングル・ステップする間に割り込み処理に分岐し、割り込み処理を行うことがあります。
したがって、シングル・ステップでも、ブレーク・ポイントに関する注意事項に気をつけなければなりません。
- 3) シングルステップによって割り込み処理ルーチンから抜けることはできません(具体的には、割り込みルーチンの最後の"}でのシングルステップができません)。 同様に、reti 命令のシングルステップもできません。
- 4) デバッガの"Return"機能で、割り込み処理ルーチンから元のルーチンへ戻ることはできません。

14. APPENDIX.A MULTI モニタ

MULTI 用のモニタ ROM を使用して、ホストの MULTI デバッガと接続して使用する場合の設置方法と使用上の注意事項について説明します。

14.1. ボードの設置

14.1.1. RTE for Win32 のインストール

MULTI デバッガを使用する場合には、PC に通信用のソフトウェア (RTE for Win32) をインストールする必要があります。ソフトウェアのインストールとテストについては、添付の「RTE for Win32 インストール・マニュアル」を参照してください。

14.1.2. ディップ・スイッチ1 (SW1)

通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.1 ディップ・スイッチ1 (SW1)』参照)。

14.1.3. ディップ・スイッチ2 (SW2)

SW2-1 を ON にして、NMI 生成回路からの NMI を CPU の端子に接続してください。その他のスイッチは通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.2 ディップ・スイッチ2 (SW2)』参照)。

14.1.4. ディップ・スイッチ3 (SW3)

通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.3 ディップ・スイッチ3 (SW3)』参照)。

14.1.5. ディップ・スイッチ4 (SW4)

SIMM を使用する場合は、SW4-4 を SIMM が EDO タイプか FastPage タイプかによって設定してください (ユーザプログラムで SIMM 関係の SFR の設定を行う場合は、SW4-4 の設定は行わなくても構いません)。その他のスイッチは通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.4 ディップ・スイッチ4 (SW4)』参照)。

14.1.6. ディップ・スイッチ5 (SW5)

SW5-1 ~ SW5-3 および SW5-5 ~ SW5-6 はデフォルト値に設定してください。その他のスイッチは通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.5 ディップ・スイッチ5 (SW5)』参照)。

14.1.7. ディップ・スイッチ6 (SW6)

本ボードを ISA バス・スロットに組み込んで使用する場合は、本ボードが使用するホスト上の I/O アドレスを設定してください。デフォルトの設定では、I/O アドレスの 020xH(0200H ~ 020FH)番地を使用するように設定します。I/O のアドレスの設定に際しては、設定した I/O アドレスが他のボードやマザーボードの I/O アドレスとぶつからないようにしてください (『3.1.6 ディップ・スイッチ6 (SW6)』参照)。

14.1.8. ディップ・スイッチ7 (SW7)

ディップ・スイッチ7 は汎用の入力ポートに接続しているスイッチですが、Multi 用の ROM モニタでは、Multi と RS-232C で通信する時のボーレートの設定と、プロファイラ周期の設定に使用しています。また、SW7-5 ~ SW7-8 は OFF でご使用ください。

SW7		ポートレート
1	2	
ON	ON	未使用
OFF	ON	38400 baud
ON	OFF	19200 baud
OFF	OFF	9600 baud (出荷時の設定)

ポートレートの設定

SW7		プロファイラ周期
3	4	
ON	ON	タイマを使用しない
OFF	ON	200 Hz 5ms
ON	OFF	100 Hz 10ms
OFF	OFF	60 Hz 16.67ms (出荷時の設定)

プロファイラ周期の設定

14.1.9. JP2

オープン状態にしてください。

14.1.10. AVDD 切り替えジャンパ (JP3)

通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.2.2AVDD 切り替えジャンパ (JP3)』参照)。

14.1.11. ROM 容量切り替えジャンパ (JP5)

Multi 用のモニタが入った ROM の容量に合わせて設定してください。 (『3.2.3ROM 容量切り替えジャンパ (JP5)』参照)。

14.1.12. TIC 供給クロック切り替えジャンパ (JP6)

通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.2.4TIC 供給クロック切り替えジャンパ (JP6)』参照)。

14.1.13. ボードの接続

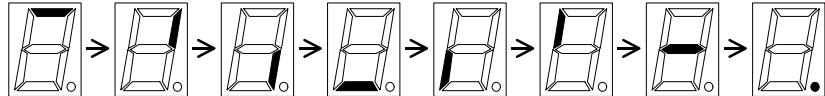
「4ホスト PC との接続」を参照して、シリアルまたは、ISA バスのどちらかで、PC と接続してください。

14.2. Multi モニタ

14.2.1. 起動時の7Seg-LED

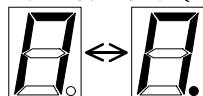
Multi 用の ROM モニタは、ボードの電源を入れると 7Seg-LED が次のように動きます（黒い部分が点灯部分）。

1)7Seg-LED のチェック動作（下図参照）

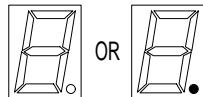


2)SRAM の簡易メモリチェックによる数字のカウント

3)rteserv の接続待ち状態（プロファイラのタイマを停止している場合は、ドットの点滅無し）



4)rteserv 接続状態（ドットの点灯は、rteserv が接続した時のドットの点灯状態が保持される）



14.2.2. ROM モニタ・ワーク RAM

ROM モニタでは、SRAM の上位の 32KB (3E7-8000H ~ 3E7-FFFFH) をワーク用の RAM として使用しています。したがって、この空間とこの空間のイメージ領域は、ユーザ・プログラムで使用できません。

14.2.3. _INIT_SP の設定

モニタで _INIT_SP (スタック・ポインタの初期値) は、3E7-7FFCH (モニタ・ワーク RAM の直前) に設定されています (Multi の環境で _INIT_SP で変更することもできます)。

14.2.4. リモート接続

Multi のサーバ (rteserv) との接続は、シリアル接続と ISA バス接続が選択できますが、一度接続した方から他方に切り替える場合には、モニタをリセット（リアパネルのリセット・スイッチを押す）してから RTE for WIN32 のユーティリティ Check RTE で接続を変更してください。

14.2.5. タイマ割り込み

タイマ割り込みを禁止しますと、Multi のプロファイラ機能が使用できません（タイマ割り込みの設定については『14.1.8 ディップ・スイッチ 7 (SW7)』を参照）。

14.2.6. ハードウェアの初期化

ROM モニタでは、ROM,SRAM,EDO-DRAM のそれぞれの空間に関して、40MHz 動作時に適合するように、CPU の内部(SFR)およびボードを初期化します（『12.ソフトウェア』参照）。

また、SIMM の空間に関しては、SIMM が実装されている時のみ、40MHz 動作時にアクセスタイム 60nS の SIMM が実装された場合に適合するように CPU の内部(SFR)を初期化します。この時、ディップスイッチの設定状態により、EDO-DRAM か FastPage-DRAM かを設定します（『3.1.4 ディップ・スイッチ 4 (SW4)』参照）。

注意：ROM モニタは、SIMM の実装を確認するために、リセット時に SIMM のベースアドレスに対して、32Bit のリード / ライトを行います（オリジナル・データは書き戻されます）。

14.2.7. 特殊命令

以下の命令を、シングルステップ、ブレークポイント及びシスコール機能で使用しています。

BRKTRAP 命令 (0xnn40)

ユーザプログラム内では、ブレーク命令と解釈されるコードは使用しないでください。

14.3. RTE コマンド

サーバと接続すると TARGET ウィンドウが開かれ、ここで RTE コマンドを発行することができます。表に RTE コマンドの一覧を示します。

コマンド名	内容
HELP, ?	ヘルプ表示
INIT	イニシャライズ
VER	バージョン表示
SFR	内蔵レジスタ(SFR)の変更、表示

RTE コマンド一覧

コマンドには、パラメータを必要とするものがあります。アドレスやデータなど、数値のパラメータは、全て 16 進数とみなされます。以下の数値指定は誤りです。

0x1234 1234H \$1234

14.3.1. HELP(?)

<書式> HELP [コマンド名]

HELP は、RTE コマンドの一覧や書式を表示します。また、"HELP"と入力するかわりに"?"としても同様です。コマンド名を省略すると、使用できるコマンド一覧を表示します。

<例> HELP SFR

SFR コマンドのヘルプを表示します。

14.3.2. INIT

<書式> INIT

INIT は、RTE 環境の初期化を行ないます。通常、このコマンドは使用しないでください。

14.3.3. VER

<書式> VER

VER は、RTE 環境のバージョンを表示します。

14.3.4. SFR コマンド

<書式> SFR [レジスタ名 [=データ]]

レジスタ名を指定してデータを省略した場合は、そのレジスタからリードしたデータを表示します。レジスタ名と"="の後にデータを指定した場合には、そのレジスタにデータをライトします。データのサイズは、指定したレジスタの有効サイズで自動的に決定されます。内部 I/O レジスタの詳細については、CPU のマニュアルを参照してください。

<例 1> SFR

レジスター一覧を表示します。

<例 2> SFR IMR

レジスタ IMR の内容を表示します。

<例 3> SFR IMR=55AA

レジスタ IMR にデータ 55AAH をライトします。

15. APPENDIX.B PARTNER モニタ

PARTNER 用のモニタ ROM を使用して、ホストの PARTNER と接続して使用する場合の設置方法と使用上の注意事項について説明します。

15.1. ボードの設置

15.1.1. ディップ・スイッチ1 (SW1)

通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.1ディップ・スイッチ1 (SW1)』参照)。

15.1.2. ディップ・スイッチ2 (SW2)

SW2-1 を ON にして、NMI 生成回路からの NMI を CPU の端子に接続してください。その他のスイッチは通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.2ディップ・スイッチ2 (SW2)』参照)。

15.1.3. ディップ・スイッチ3 (SW3)

通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.3ディップ・スイッチ3 (SW3)』参照)。

15.1.4. ディップ・スイッチ4 (SW4)

SIMM を使用する場合は、SW4-4 を SIMM が EDO タイプか FastPage タイプかによって設定してください (ユーザプログラムで SIMM 関係の SFR の設定を行う場合は、SW4-4 の設定は行わなくても構いません)。その他のスイッチは通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.4ディップ・スイッチ4 (SW4)』参照)。

15.1.5. ディップ・スイッチ5 (SW5)

SW5-1 ~ SW5-3 および SW5-5 ~ SW5-6 はデフォルト値に設定してください。その他のスイッチは通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.1.5ディップ・スイッチ5 (SW5)』参照)。

15.1.6. ディップ・スイッチ6 (SW6)

本ボードを ISA バス・スロットに組み込んで使用する場合は、本ボードが使用するホスト上の I/O アドレスを設定してください。デフォルトの設定では、I/O アドレスの 020xH(0200H ~ 020FH)番地を使用するように設定します。I/O のアドレスの設定に際しては、設定した I/O アドレスが他のボードやマザーボードの I/O アドレスとぶつからないようにしてください (『3.1.6ディップ・スイッチ6 (SW6)』参照)。

ISA バス・スロットに組み込まずに使用する場合は、このスイッチはデフォルトの設定でお使いください。

15.1.7. ディップ・スイッチ7 (SW7)

ディップ・スイッチ7は汎用の入力ポートに接続しているスイッチですが、Partner用のROMモニタでは、RS-232Cで通信する時のボーレートの設定にSW7-1/2を使用しています。SW7-3～SW7-4はON、SW7-5～SW7-8は常にOFFでご使用ください。

SW7		ボーレート
1	2	
ON	ON	115200 baud
OFF	ON	38400 baud
ON	OFF	19200 baud
OFF	OFF	9600 baud (出荷時の設定)

ボーレートの設定

注意：SW7-3,SW7-4は、Multi用ROMモニタでの初期値と異なります。Multiから切り替えてご使用になる場合は、必ず、変更してご使用下さい。

15.1.8. JP2

オープン状態にしてください。

15.1.9. AVDD切り替えジャンパ(JP3)

通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.2.2AVDD切り替えジャンパ (JP3)』参照)。

15.1.10. ROM容量切り替えジャンパ(JP5)

Partner用のモニタが入ったROMの容量に合わせて設定してください。 (『3.2.3ROM容量切り替えジャンパ (JP5)』参照)。

15.1.11. TIC供給クロック切り替えジャンパ(JP6)

通常デフォルトの設定でご使用ください (『3.2.4TIC供給クロック切り替えジャンパ (JP6)』参照)。

15.1.12. ボードの接続

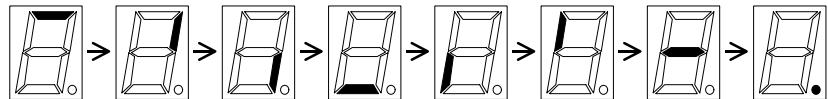
「4ホストPCとの接続」を参照して、シリアルまたは、ISAバスのどちらかで、PCと接続してください。

15.2. PARTNER モニタ

15.2.1. 起動時の7Seg-LED

Partner 用の ROM モニタが実装されている場合、ボードの電源を入れると 7Seg-LED が次のように動きます（黒い部分が点灯部分）。

1)7Seg-LED のチェック動作（下図参照）



2)SRAM の簡易メモリチェックによる数字のカウント

15.2.2. ROM モニタ・ワークRAM

ROM モニタでは、SRAM の上位の 32KB (3E7-8000H ~ 3E7-FFFFH) をワーク用の RAM として使用しています。したがって、この空間とこの空間のイメージ領域は、ユーザ・プログラムで使用できません。

15.2.3. 強制ブレーク用の割り込み

モニタの通信及び、強制ブレーク（ESC ボタン）で使用する割り込みは、NMI を使用します。

15.2.4. SP の設定

モニタのスタック・ポインタの初期値は、3E7-7FF0H に設定されています。モニタでは、ユーザ・プログラムで設定したスタック領域を 32 バイト使用します。

15.2.5. リモート接続

デバッガとの接続は、シリアル接続と ISA バス接続が選択できますが、一度接続した方から他方に切り替える場合には、モニタをリセット（リアパネルのリセット・スイッチを押す）した後、RPTSETUP.exe を起動して通信路の変更を実施してください。

15.2.6. ハードウェアの初期化

ROM モニタでは、ROM,SRAM,EDO-DRAM のそれぞれの空間に関して、40MHz 動作時に適合するように、CPU の内部(SFR)およびボードを初期化します（『12.ソフトウェア』参照）。

また、SIMM の空間に関しては、SIMM が実装されている時のみ、40MHz 動作時にアクセスタイム 60nS の SIMM が実装された場合に適合するように CPU の内部(SFR)を初期化します。この時、ディップスイッチの設定状態により、EDO-DRAM か FastPage-DRAM かを設定します（『3.1.4 ディップ・スイッチ 4 (SW4)』参照）。

注意：ROM モニタは、SIMM の実装を確認するために、リセット時に SIMM のベースアドレスに対して、32Bit のリード / ライトを行います（オリジナル・データは書き戻されます）。

15.2.7. 特殊命令

モニタでは、以下の命令を、シングルステップ、ブレークポイント及びシスコール機能で使用しています。

BRKTRAP 命令 (0xnn40)

ユーザプログラム内では、ブレーク命令と解釈されるコードは使用しないでください。

- Memo -

RTE-V850E/MS1-PC ユーザーズ・マニュアル

M721MNL01

Midas lab